

# 石川淳「善財」論——愛と錯覚の政治学

山口俊雄

《Why is almost every robust healthy boy with a robust healthy soul in him, at some time or other crazy to go to sea?》Herman Melville, *Moby Dick or The Whale* (1851)

《爾の時に善財童子は、弥勒菩薩を敬ひ繞り、合掌して白して言さく、『唯願はくは大聖、楼観の門を開き、我をして入ることを得しめたまへ。』／爾の時に弥勒菩薩、即ち右の指を弾きたまへば、門は自然に開き、善財即ち入る。入り已りて還つて閉じたり。》「華嚴経」〈入法界品〉

はじめに

第一章 求道の若者の論理——寛宗吉

第二章 愛の論理——オカミと稲富伊奈子

- (1) 《——姪欲ハ即チコレ道ナリ。》
- (2) 善財童子
- (3) 伊奈子との再会
- (4) 《Come again! がちやん。》
- (5) 《灯の無いホテル》

第三章 海の論理・陸の論理

(1) 海の論理——志方大吉

(2) 陸の論理——大草南翠と千木千春

第四章 現実の論理

(1) 《Come again! がちやん。》という《鉄壁》

(2) 時期設定の意味

(3) 空間設定の意味

おわりに

## はじめに

石川淳「善財」は『新潮』一九四九年八月号に発表され、石川の作品集『鷹』（講談社、一九五三・七）<sup>3</sup>に初収録された四〇〇字詰め原稿用紙で一一五枚程度の《中篇》<sup>4</sup>小説である。

あらずじは次の通り。

敗戦直前に徴用のために帰郷するまで東京・大井町に住み禪宗系の大学の予科に通っていた二一歳の笈宗吉は、一九四七年一月始め、志方大吉が操る五〇トン足らずの船に乗り、房州南端の故郷から東京・芝浦に上陸、志方に誘われて食事に入った店のオカミに酔った勢いで童貞を奪われる。寄寓先の向いに住む陸軍少将の娘で、敗戦前から憧れていた二歳下の稲富伊奈子への再会を期するが、今や女学校を中退し新橋のヤミ市で父の営むヤキトリ屋を手伝っていると聞く。やっと探し当てたヤキトリ屋で再会した伊奈子は、ガラの悪い酔客と渡り合えるほどの蓮葉な女に変貌していたが、純潔を信じて疑わない宗吉は、愛を告白。軽くあしらわれた宗吉だったが、終電を逃したためホテルに泊まることを促す伊奈子に不潔なものを感じ拒絶する。その後、寄寓先にもほとんど帰らず、荒んだ風貌でパンパンを連れ歩くようになった宗吉であったが、伊奈子の働くヤキトリ屋につながる木戸にはねつけられ続け、伊奈子と仲直りできない。宗吉を気遣い、海に來い、船に乗ろう、と誘う大吉であったが、宗吉の答えは《遠すぎる》（四四六）<sup>5</sup>で、木戸一つ破れなまま足踏みを続ける宗吉であった。

まず、発表時の反応をざっと見ておこう。山澤種樹が、《うかつな読者もあつたもので石川淳の「善財」（新潮）を「善哉」と思ひこんでゐ

た人がある。本文の中にも「善財童子は、絵本に依れば、文殊よりはじめて五十三箇の覺者に逢つてつひに道をえた」といふやうに、ちやんと説明があるのだが、当今の読者はあまり細かいところに注意を払はないのか、或ひは恐らく書かれたことを知らない（そして知らうともしない）ので、己に興味のあるところだけを散見するといふ悪い癖がついてゐるやうである》（「ナラタージュ一九四九年（文壇録音）」（『東北文学』一九五〇・一、二六頁）と触れているが、《当今の読者》への愚痴であり、作品についての評価に及んでいない。

北原武夫・中野好夫・林房雄「創作合評」（『群像』一九四九・一一）では、「聖書—仏典—虚無」という小見出しの下、敗戦後の石川淳作品とその愛読者を全否定する会話が続く。林曰く、《この人の制作公式は、世相風俗画に宗教的な物々しげな粹をはめて出品することですね。これが彼の手であつて、その粹をはずせば、たゞの世相風俗画、織田作之助風の泥絵なのだが、それにキリスト教的な、または仏教的な粹をつけて、なにかインテレクチュアルなものに見せる》（二〇四頁）。北原曰く、《それと全然同じ意味ですが、ばかばかしい気が先に來ますね。額縁をとつてしまつたら何も無い。あとは、話術を駆使するもつて生まれた巧妙さがありますけれども、そういうものが文学の中でどのくらいの重みを占めるかということは別のことですし、なにか仏典、バイブル、そういう裝飾を加味するところだけにしか存在理由がないというふうに僕には思えてしまふ》。林曰く《焼跡のイエス》、「かよひ小町」にしても、みんな内容は戦後の世相を才筆で書きなぐつて、それに必ず宗教的な粹をはめている。この内容とこの粹とは何も関係がないということを読者がどうして見破らぬのか、僕は作者よりも読者を責めたいくらいに思う》（二〇五頁）。そして、くだんの「善財」について、林は、《これだつて、

善財童子と青年の巡歴をいかに結ぼうと思つても、本当に善財的な求道をやつてゐる人だつたら結ばはしませんよ。これは明かに関係のない縁ですが、それが簡単に結びついてしまつてゐる。キリストと変な不良少年と一緒になつたり……と述べる。林にしろ北原にしろ、驚くほど偏狭な文学観——おそらく自然主義系リアリズム以外のものは文学ではないと言ふのであろう——からの放言で、彼らの作品が今日まず読まなくなつたのもむべなるかなと思わされるが、石川作品について好き嫌いがはつきりと分かれる実例としては興味深いとも言える。

次に、初出時から少し時間が経つてからだが、初収単行本『鷹』刊行時の反応も拾つておこう。神西清は次のように述べる。

この短篇集の巻頭を飾つてゐる秀作『善財』からの勝手な抜書きである。ここで善財童子に譬へられてゐる青年宗吉は、焦土に道を求める求道者である。混沌に純潔をさがす潜水夫である。へんに道学臭いことをほざくと言ふ勿れ。じつは僕たちみんなひとしく道をもとめて荒野にさまよふ群にすぎまい。そんな志のきれつばしでもある人なら、まづこの『善財』に逢つてみなさいと僕は勧めたい。もつとも僕は、この作者が果して文殊であるかどうかは知らないが、とにかくその門へ至る道へわれわれを突つばなすことに妙を得た、すこぶる意地の悪い案内人であることだけは、ここ十数年来の作品をとほして肝に銘じてゐる。それで十分ではないか。あとは（もし欲するなら）われわれの純粹運動が始まるだけの話である。あとは知らない。（わが読書新刊 講談社刊 石川淳著鷹）『群像』一九五三・一一、一七三頁）

村松剛は次のように述べる。

元来氏の作品は決して難解な性質のものではない、作者は俗世間の愚劣に染まつた人間に、作品の上で深くつきあはうとする努力を少しも払つてゐない。だから氏の作品には、直接自分を語つた二、三の小説を除くなら、普通の意味で生きた人間と呼べるものはひとりも登場して来ない。極端に云へば、人物はどれもこれも作者の頭脳から作り出された軽妙な理窟を語る傀儡にすぎない。たとへば「善財」の二人の主人公「船長」と「宗吉」とにはいつものやうにそれ／＼実生活人と純潔者といふ役割が明瞭に割振られてゐるといふふうには。こんな単純な筋書を読めぬ読者はあるまい。たゞ作者はかうした筋書を探るのに、常に独特な韜晦の手法を以てする。それが氏の作品に難解な風貌を与へてゐるのである。（Books 石川淳著『鷹』『近代文学』一九五四・一、五五頁）

こうして同時代評を瞥見してみると、石川作品が物語内容よりも、語り方など形式面に重きを置いて語られがちだという印象が濃厚だが、林・北原が、おそらく自然主義系リアリズムを基準にしたのであろう文学観・小説観に基づいて、『世相風俗』を描き込んだ物語内容と形式（枠、額縁）との乖離を否定的に言うのに対して、村松はそのような乖離を『韜晦』をむしろ前提視して、登場人物が作者の『傀儡』であるよ／＼な別の原理に基づいた小説世界であることを言い、神西も『すこぶる意地の悪い案内人』作者に『突つばな』されるべく石川独自の作品の世界に入り込んでみよと言う。

〈作品外の現実世界〉『世相風俗』と〈現実世界を踏まえながら石川

独自の手続きで生み出された作品世界Ⅱ観念」とに分けた場合、前者と後者と、どちらに重点を置くかで評価が分かれていると言っても良いのかもしれない。

では、同時代評以降のいわゆる先行論・先行研究の領域ではどのように論じられて来たか、続けて見ておこう。

まず、時代状況Ⅱ《世相風俗》を重視するか、それともそこからの距離を重視し、時代状況を越えた普遍性の如きを重視するか、で大きく分けることができる。

石川氏は、戦後矢継早に『窮菴売卜』『無尽灯』『焼跡のイエス』『かよひ小町』等の多くの作品を書いた。これらはいずれも戦後風俗に取材したもののだが、決して風俗そのものの上つつらを対象としてゐるのではなく、作者の内部に再構成せられた混乱と頽廃との鮮かな認識をなしてゐる。かうした傾向が『善財』に至ると更に強まつて、戦後風俗は作品の外形、謂はば借物にすぎず、そのやうな風俗小説的趣向の集大成の上に、観念的な絵模様を繰りひろげようとしてゐる。「略」戦後の混乱した風俗の中では、人間をなまのまま扱ふのに適してゐたから、作者は善財と文殊といふ恋愛的主題を、ちよつと応用してみたのである。(福永武彦<sup>6</sup>)

かの善財童子とおなじく、わが青春の童子も遍歴し、見聞する。そしてこの遍歴と見聞とに準じてのみ、一風俗がわれわれのまへにえがき出される。してみれば、作者はここでもまた、いかなる意味においてもたんなる風俗作家ではない。風俗をうつすことが主眼なのではなく、主題は明らかに他のところにあり、そしてこの主題によ

つてのみ、作品のなにかの部分を占める風俗的部分も展開するわけだ。(井澤義雄<sup>7</sup>)

また『善財』の宗吉のように、「いくさのまえ」をひとつの理想として、「いくさのあと」の人々の生活に驚き、他人の生命力の中で押しつぶされかける者もいる。これは、「いくさのあと」の一人の青春者が現実の中でいかに変化していったかという過程を描きだした秀れた作品である。

石川淳の小説においては、「いくさのあと」の風俗は風俗として描かれ、生活は生活としてリアルではあるけれど、やはり描かれてゐる本当の世界は、そこに出てくる人その思想や心情の変化であり、例えば一人物の精神的な成長そのものであった。(安藤始<sup>8</sup>)

戦争は、人間の心身を縛る。人間の心身を縛るのはしかし、戦争だけではない。人間は、平和によつても、その心身を縛られる。人間の心身を縛るものは、必ずしも人間の外にあるとは、限らないのである。人間の心身を縛るものは、人間の中にもある。「略」まことに、人間の心身を縛るものは、人間の内にこそあったのである。戦後という状況は、この人間の条件を剥き出しにして見せたといえよう。(高史明 コサミヨ<sup>9</sup>)

これらは、作品の時代状況Ⅱ風俗に関わる部分を最小限に見積もる評価の仕方である。他方で、時代状況あるいは時代状況の変化を踏まえた読み方もある。

「遠すぎる」とは何から遠すぎるのか。作者は主人公宗吉ともいかなる遠い目標をめざしつつ、闇の中に残るのか。わたしはここに昭和二十四年、早くも復活しつつあった社会秩序、見かけの安寧に蔽われた猥雑な日常への嫌忌、そして、戦後の創世記の闇空に作者がまぢかくふり仰いだ無名の形而上学がまた遠ざかりつつあることの子感を思わずにはいられない。いまや創世記は終りを告げ、日本の風土に固有のあの循環的時間がいつのまにか回復していた。(野口武彦<sup>10</sup>)

ところが、昭和二十四年ごろはどうか。崩れ、汚れ、むき出しになった現実が、もはや探るまでもなくだれの前にも練りひろげられ、しかも、それらを統一する理念は、曖昧な民主主義というものでさえ曇りはじめて(いや、それが、果たして理念であり得たか)まだ作者の中にも、読者の心にも育っていなかった。何にせよ、一つのものを目指めようとすればするほど、かえって自家撞着におちいつて、拳句の果ては、太宰たちのように生をも放棄せざるを得なくなってしまう。そういう時点での、肉と愛の物語は、「善財」のように書かれざるを得なかったといえる。(中島真一<sup>11</sup>)

これら二つの論は、この作品が一九四九年八月に発表されたことを踏まえて、GHQによる占領政策の転換、「戦後民主主義」への期待の変質等の中に作品の主題を位置付けようとしたものである。大状況に落とし込む受け止め方として、今日から見ても十分に首肯される見方ではあるが、発表時期こそ一九四九年ながら、作中世界の時間的設定が《昭和二十二年の一月はじめ》(二三八)から《四月の末》(四三二)までと明

記されていることを踏まえれば、この発表時期から二年余りも遡った非常に具体的な時間的設定にもっとこだわってみる必要があるのではなからうか。

本稿では、時代状況から切り離す読みとは一線を画し、具体的な時間設定にこだわりのながら、作品の新たな読み方を提案したい。時代状況を重視するということは、林・北原の言う《世相風俗》面を重視することでもあり、《戦後風俗は作品の外形、謂はば借物にすぎず、そのやうな風俗小説的趣向の集大成の上に、観念的な絵模様を練りひろげようとしてゐる》という福永のよな見方にくみしないが、とは言え、石川が組み込んださまざまな仕掛けが決して林・北原が言うよな外付けの無関係な枠・額縁ではないことも確認し、言わば時代状況⇨風俗性と観念性との絡み合い・綯い交ぜの中にこの作品が成立していることを明らかにしたい。

まず第一章で主人公の寛宗吉の特徴、その世界観・行動原理を確認した上で、次の第二章で、典拠的な文献の確認も挟みながら、この作品の物語の中核部分を成している宗吉の性愛に関わる体験と認識の展開を追う。第三章では宗吉を取り巻く人物、志方大吉・大草南翠・千木千春についてその特徴と作中世界での役割を検討し、そういう人物を主人公の周囲に配した作品世界の構図を整理する。ここまでの基礎的な作業を踏まえて、第四章で、《一箇の青春の劇》《観念的な絵模様》とも読めるこの物語が、時代状況・政治状況と関わらせて読み得ること、そうすることによって始めて見えて来る奥行きを有していることを示す。

## 第一章 求道的若者の論理——寛宗吉

「善財」の主人公は、房州南端で漁業を営み、農園を持ち、戦災に遭うまでは東京に事務所も持っていた素封家・寛家の三男・宗吉である。

敗戦直前の六月に徴用のために帰郷するまで、東京にある禅宗系の《某宗大学の予科》に《みづから一途に撰んだ学校》として通っていたが、《いくさのうつつたうしい季節にあつて》《煙硝の目つぶしをくはされた身のあがきを靈魂の振方として受けとつて》《ほとんど禅に於て生活の仕方を見つつけようとするまでにおもひつめた姿勢を示した》(三八九)。戦時下の《いくさ理念》(三九〇) Ⅱ 皇国史観の強制から逃れるかのように、《靈魂》のことにこだわり、禅に没入する宗吉は、まず第一に生活の上で求道性を持った人間、悟りを求める若者であった。

宗吉の性格的な特徴の二つ目として、何かにつけて《「いやだ。」で押し通すことが挙げられる。作品ははじめの房州から芝浦へ向かう船上での場面。みぞれに濡れる宗吉に船長室に入るよう船長の志方大吉が促しても、返答は《「いやだ。」(三九二)のみ。

この《「いやだ。」を支える宗吉の《性分》あるいは倫理性について、紙幅を費やして次のような説明が施される。

しかし、船長室にはひることをいやだといったのはかならずしも剛情のためではない。ひとがみな濡れてゐるのに自分だけ濡れないとこころに避けるといふこと、およそひとびとの不幸不運の分前の中で自分だけ特別にはづれるといふことがずるぶんさびしく、かなしく、それは不吉なことさへあつた。それゆゑに、いやなのである。

もしかさういふ態度を同情、憐憫、虚飾、偽善なんぞの、いささか優越ぶつたおもひいれの仕打のやうに見られたとしたらば、宗吉は赫と逆上して、ひとりでじれて、わめき、あばれ出すにちがひない。げんに、こどものとき、菓子でもおもちゃでも他のきやうだいにあたへられなかつたものが自分にだけあたへられなるとすると、きまつて「いやだ。」であつた。母親がうっかり見当ちがへに「感心な子だね。」とでもいはいものならば、大あばれにあばれて手がつけられなかつた。いくさのあひだの飛行機工場で、寛の家と懇意の工場長がなにか特典をあたへてくれようとしたときにも、やつぱり「いやだ。」で押しとほした。それはかげで、へんな性分とも、損な性分ともいはれた。宗吉のはうでは、特典一般にぶらさがらうとあせることこそ、ぶざまであり、貧棒性であつた。そのいやらしさ、みじめさに堪へられなかつた。(三九二)

二一歳にもなつていまだ《「いやだ。」で押し通そうとする宗吉は確かに幼くも見えるが、ただそこには公平さ・公正さを遵守徹底しようとする倫理性が働いていることに留意しておきたい。

宗吉の特徴として取り上げるべき三点目は、味覚についてである。

宗吉はこどものときから舌の感覚が非常に鋭敏であつた。口にはひるものの本質につき、舌が神秘的な洞察力をもつてゐるかのやうに、これはうまいもの、これはまづいものと明確にあちはひ分けて、そのうまいまづいがただちに好悪となつて、まづいものはどうしても口にはひらなかつた。それは世にありふれた食道楽の撰りごみとはちがふものであつたが、「略」(三九六、三九七)

これだけであれば、幼い子どもなどにありがちな食べ物の好き嫌いを大人になっても引きずっているだけのようだが、

もつとも、この舌のおかげで、いくさのあひだの東京では、げつそり瘦せた。きもちの上でこそ、ひとがみなまづいものを食はされてゐるのに自分だけそれを拒むといふことに堪へられなかつたが、いや、きもちよりはまづ生理的のべつに空腹に堪へられなかつたが、舌のはうはほとんど分離的に、頑強にうまいまづいを押しとほした。そして、食ひもののまづさに於て、てきめんにくさ理念のまづさを噛み分けて、双方ともに咽喉にとほらなかつた。自分が理念の食ひものなることをまぬがれたのは、じつは例の靈魂の心配よりも、餓死を賭けた舌の功といふべく、なにかさいはひになつたか知れない。(三九七)

となると、この《舌の感覚》は比喩的、寓意的意味合いを帯びて来る。以下、この比喩的な意味合いで《舌の感覚》が用いられている箇所を本文から拾つてみよう。

宗吉の舌の感覚に依る分類では、この志方といふものがしぜんうまものの部にはひつてゐた。(三九九)

宗吉は赫と顔がほてつた。かならずしもいやだからではなかつた。じつは、ここにある女どもの中では、このママさんとかオカミと呼ばれるものは、年かさではあつたが、着附もくたびれず、しぐ

さに修練のみがきがかかつて、耳のうらに垢をためてゐるやつらにくらべてはまあ「いける」はうであつた。(四〇〇)

舌の感覚でいへば、うまいにもまづいにも、てんで分類からはづれたところに、南翠がゐた。所詮、これは取つて以て食ふべからざるものに属するのだらう。(四〇七)

「道なんぞ規格版にまかせておけばいいぢやないか。それが小人の道だ。小人に食ひつばぐれは無いね。さうさう、戦中戦後を通じて相変らねえものがここにあつたつけ。おれはむかしも今も単に小人なんだ。おかげで、破滅なんぞにはめぐり逢はないさ。」

宗吉はそろそろ引きあげの潮時だとおもつた。ウイスキーの味も舌にもたれて、もうのむに堪へなかつた。これもまた酒の中の小人にちがひない。(四二〇)

このように、《舌の感覚》によつて宗吉は他の人物との距離を測っているのである。

必ずしも比喩的とはいひ難い次のような例もある。

「ゆつくりしてつてね。」

コップにいつぱいづがれたのは、ビールではなかつた。いやにしちやけた液体の、ぐつとあふると、のどにぴりつと焼けついて、舌ざりがうまいか、まづいか、夢中であつた。いや、舌がいふことをきかなくなつてゐた。しかし、最後の一口をのみのこして、さすがに眉に皺がよつた。

「あなた、のめないのね。サイダー割つたらどう。」

かーつとした。面罵にひとしかつた。のどがただれて、たちどころに死なうとも、あとには引けない。向うの四五人づれがまた笑つたのを、あたかも嘲弄のやうに聞いた。

「う、うん。」

首をふつて、壘をひつたくつて、手酌でぐいぐいと、必死のおもひで二杯、三杯、四杯、五杯目のなかばまで行つて、がつくり、そこに陥穽が待つてゐた。(四二七、四二八)

こちらはまず何よりも酒(バクタン)の味そのものについての言及であり、比喩ではないが、ただし、物語の展開上、宗吉が敗戦後の現実に飛び込んでゆく場面でのエピソードであり、通過儀礼としての象徴的な意味合いも担つていよう。

さらにもう一点、宗吉の特徴、世界認識上の特徴として取り上げておきたいのが、戦中から敗戦後にかけての宗吉の履歴について、《まつたく、いくさ以来二十一歳になる今日まで、諸事のべつに錯覚づくめであつた》(三八八、三八九)「i」と語られている点である。

作中、《錯覚》の語を含む箇所をすべて拾つてみよう。

東京の焼きはられた年の六月に、徴用あわただしく、房州の南端にある国もとに呼びもどされたのが、ついさきのふのこのやうといふよりも、むしろ時間の無い錯覚に似た。(三八八)「ii」

禅といくさ理念拒絶と特攻隊志願とでは矛盾があるのかも知れないが、その矛盾に於て十九歳の生活が充実してゐて、悔いるべき筋合

は毫末も無かつた。それはみな錯覚といふものだらうか。じつに錯覚を生活しつづけたがゆゑに、しまつたとおもふやうな穴ほこはどこにも無い。青春を生理めにしないですんだといふことである。(三九一)「iii」

眼のさきに、みぞれの白くちらちらするのは、また性こりなく、これからも見るであらうさまざまの新規の錯覚の、荒いかすり模様のやうであつた。(三九一)「iv」

その東京の顔の中に、ぼつりと一点、淵に花をおとしたやうに、白く、小さく、しかしいやにたしかに、一つの顔が宗吉の眼を打つて追つて来た。ある少女の顔である。「略」ここにまた地理的に東京にちかづいて行くとともにたちまち時間的距離が消えうせたくぐあひに、胸の底からばつとにほひ出して、宙に咲きひろがり、遠い記憶は切実なまぼろしとなつて、それはたつたいま突発した事件に似た。けだし、錯覚の中のもつとも大きいものだらう。(三九三)「v」

ふたたび気がついたときには、女のからだはもうそこに無かつた。しかし、どうしたつて錯覚ではない。蒲団のぬくもりはさめても、肉体の純潔の上に刻印がのこつた。(四〇〇)「vi」

右のような《錯覚》の語の用例は、戦争中から上京する現在までの宗吉の生活に関わるもの「i」〜「iii」と、性に関わるもの「v」「vi」とに大別できよう。戦争中は、《靈魂の始末に気をつかつ》て《禅に於て

生活の仕方をみつけようとするまでにおもひつめた《おかげで《はやりもののいくさ理念から身を遠ざけること》(三八九)ができて、《飛行機の特攻隊を志願》したのも《いくさ理念》に共鳴したからではなく《スポーツの精神》(三九〇)からであったと、現実からのズレとしての《錯覚》が宗吉を救ったわけだが、それは既に作中の過去の出来事である。

それに対して、性に関わるものは、語りの現在に即して今後、《新規の錯覚》「IV」として東京上陸後の宗吉を悩ませることになる。このあと、夢と現実、錯覚と現実とのすり合わせ・統合の失調が宗吉にとって最大の課題となろう。

以上、この章では、宗吉の特徴として、①その求道性、②公平さ・公正さに敏感な《「いやだ。》の倫理性、それから③《舌の感覚》が鋭敏で、食べ物だけでなく、自分の周囲の人間についても《うまいか、まづいか》、すなわち直感的な好悪で判断している点、さらに④《錯覚》で戦争はやり過ぎたもの、東京上陸後、性の問題に直面し、《錯覚》だけでは通せないという課題を担うことになるだろうという点を確認した。

すべて人間としての未熟さ、幼さとも通じるものであるが、石川はそのような特徴を持つ存在として宗吉を設定している。世の中を知らない若者を主人公に据え、彼をしてその徹底して純真で一途な眼差しのみで世の中に対峙させるべく、このような幼さそのものと言っても良いシンプルな行動原理だけを付与しているのである。

しかも、宗吉は、一九四五年六月に徴用で《国もとに呼びもどされ》て以来、一年七ヶ月ぶりに東京に出るのであり、《いくさのち東京に出るのは、これがはじめて》となる。つまり、戦争末期の東京が焦土と

化して行くさまはその目で見ていたが、敗戦後の占領軍の上陸、それへの日本人の対応の具体相をその目で確かめるのはこれからのことなのである。

シンプルかつナイーヴな世界観・行動原理しか持たない宗吉が、敗戦後の混乱した東京に初めて投げ込まれた時に、何が起こるか。それが物語の核心的部分となる。

## 第二章 愛の論理——オカミと稲富伊奈子

そのような純真な宗吉が、上陸早々、志方に連れて行かれた店で、泥酔のために不覚にも童貞を奪われ、恋愛について、《肉体の純潔》について煩悶し始める。この章では、この《愛の論理》《愛の弁証法》とも言べき問題について、その構図・展開を整理し、併せて典拠の確認等もおこなっておきたい。

### (1) 《——姪欲ハ即チコレ道ナリ。》

童貞を奪われた格好にはなったものの、宗吉はその性的な交渉にみずから快楽を覚え、《そのことが絶望的になしなかった》(四〇一)。自分の《肉体の純潔》が失われたことで、無根拠に信じていた稲富伊奈子——寄寓先の向いに住んでいたのを五年前に見初め、一度もこちらの気持ちちは告白しないまま《純粹の恋愛》(四〇二)感情を向け続けた今や一九歳の女性——の《肉体の純潔》にも疑問符が付く。

しかし、朝湯に浸かりながら、《肉体の純潔とは何だらう。その中みには、あるひはワイセツがぼろ屑のやうに詰めこまれてゐるのではない

のか》(四〇四) と思ひ直す。《肉体の純潔》という人間の肉体的条件を無視した観念的な捉え方が、実は肉体的条件の蔑視・卑俗視に基づく《ワイセツ》という捉え方と表裏一体であること、過大な評価と過小な評価とが肉体的条件をきちんと見据えていない点で同根であることに、曲がりなりにも気付き始めたということであろう。

朝湯を出たあとのこととして、次のようなくだりが続く。

——姪欲ハ即チコレ道ナリ。

宗吉はまへに宗教大学にはひつたころ、どこかでさういふことが聞きかじつたことがある。出典なんぞはきれいに忘れてしまつたが、なんでも姪欲の中に無量の道あり、それとこれとは一法平等、こはがつて寄つつかないやつは道を去ること遠しと説かれた。姪欲とは何だらう。道とは何だらう。それがどうしてスナハチコレといふことになるのだらう。なにぶんにもきのふけふで、この道にかけては駆け出しのことだから皆目判らないが、それでも朝湯のあついのがきいたのか、いくらか小ざつぱりしたやうなきもちにはなつた。(四〇四)

ここで宗吉に、自分の性体験と自分の今後進むべき道とを結び付けるという課題が提示されるわけだが、物語の展開を追う前に、先に典拠の確認をしておこう。

《——姪欲ハ即チコレ道ナリ。》とそれに続いて石川が拾っているいくつかの言葉の典拠が「大智度論」であることは、既に畦地芳弘「『善財』の解釈」が指摘する通りだが、もう少し丁寧に見ておきたい。

石川が引いているのは、その巻之第六(如實巧度(如実に巧みに度

す)の一部であり、それは仏道修行において性愛を肯定するか否定するかという議論の中で喜根法師が弟子たちに示した次のような「偈」の中の文言である。訓み下しの形で引き、石川が拾っている箇所は傍線を付しておく。

姪欲は即ち是れ道なり、悲と癡とも亦是の如し。

此の如き三事の中に、無量の諸仏の道あり。

若し人あり姪・怒・癡、及び道を分別せば、

是の人は仏を去ること遠し、譬へば天と地との如し。

道と及び姪と怒と癡とは、是れ一法にして平等なり。

若し人聞いて怖畏せば、仏道を去ること甚だ遠し。

姪法は生滅せず、能く心をして悩ましめず。

若し人吾我を計して、姪せば將に悪道に入るべし。

有無の法の異なるを見れば、是れ有無を離れず。

若し有無の等しきことを知らば、超勝して仏道を成せん。

さて、かつての寄寓先を久しぶりに訪れた宗吉は、向いに住んでいた稲富伊奈子がもはやそこに住んでおらず、もと陸軍少将の父親が新橋でヤキトリ屋「バクタン屋」を始めたのを手伝っていると知らされる。

そのバクタン屋の店の中に伊奈子の身柄もろとも自分の恋愛をそっくり引つさらつて行かれたことは、宗吉にとつて事件であつた。奪はれた「金羊毛」である。奪回しなくてはならない。その奪回といふことに、事件の意味があつた。腕に抱きとるべき伊奈子の

肉体がそこに待つてゐるはずであり、宗吉ははじめて伊奈子を肉体的に意識し、意志がそれに一致して、しぜん闘志のみなきるをおぼえた。伊奈子についてのかういふ闘志は昨夜まで無かつたもの、けさの朝湯のあつさから湧いて出たもののやうであつた。(四二二、四二三)

ギリシャ神話の王位継承に関わる秘宝が引き合いに出され、奪回すべきものとして伊奈子が見定められるが、新橋のヤキトリ屋はなかなか見付からず、宗吉の思案・思念の場面が挟まり、そこで作品タイトルとも関わる善財童子のことが出て来る。次節でその箇所を検討しよう。

## (2) 善財童子

善財童子は道をもとめて、はじめにまづ文殊に逢つた。宗吉はそのことを唐山のむかしの絵本で知つてゐる。ごたごた書いてある字のはうは何の意とも判じかねたが、巻のはじめに文殊の絵すがたが出てゐて、そのまへに可憐な童子の掌を合はせてゐるところがゑがいてあるのを、あやしく身にしみるけしきとして、もとから心にふかくとどめてゐた。のつげに文殊がゐるのは、根本智といふこころいきにちがひない、智に根本智あり後得智あり、その後得智は方便と聞いてゐる。(四二二)

ここに《唐山のむかしの絵本》とあるが、この《絵本》の同定は後段で行なおう。善財童子の物語は、「華嚴經」(入法界品)に描かれており、内容としては次のようなものである。

大乘仏教の修学の段階である十住、十行、十回向、十地という段階で修行し、最後に普賢菩薩のところへ、

善財童子は能くみずから普賢の行ぜしところの諸の大願海を究<sup>く</sup>竟<sup>ぎやう</sup>し、久しからずして当<sup>まさ</sup>に一切の仏と等しかるべし。

と云つて、究極の悟りを完成するのである。(鎌田茂雄『華嚴の思想』講談社、一九八八、六六頁、ルビは適宜省略)

このように最後に普賢菩薩を尋ねるところで求道は成就するが、作中に《文殊よりはじめて五十三箇の覚者に逢つてつひに道をえた》(四二三)とある通り、一人の覚者から次の覚者へと紹介のリレーが続き、《その就いて道を問ふものに博士あり町人あり、おとな、こども、えらいやつ、えらくないやつ、雑多にゐる》とあるように、商人、遊女、外道なども含むさまざまな《覚者》(善知識)を歴訪するという形、すなわち、旅、求道の旅という形を取つてゐるところがポイントである。《ヨーロッパのものに比較すると、パニヤンの『天路歷程』にあたる》<sup>15)</sup> だろうが、巡礼の旅であると同時に自分探しのでもあり(例えば「お遍路」|| 四国八十八箇所巡拝)、双六的・ゲーム的でもある。要するに空間的な展開性があるのである。

それゆえ、『岩波仏教辞典(第二版)』の「善財童子」の項に、

善財の求法の旅は菩薩の修道の階梯を示すものと解され、古来より仏教徒に親しまれて偈贊<sup>げざん</sup>に表されたり絵図に画かれたりした。遺

例に、ボロブドゥールの善財童子歴參の浮彫図（八一九世紀）、敦煌莫高窟壁畫の華嚴經變相図（九世紀）があり、わが国の『華嚴五十五所繪卷』（平安末期）は、善財童子の善知識歴參の物語を描いた繪卷である。なお俗説によると、東海道五十三次は、これに由来するといわれる。（岩波書店、二〇〇二、六一六頁、原文横書き。引用に当たりアラビア数字を漢数字に、コンマ・ピリオドを讀点・句点に改めた。）

とあるように、彫刻化・繪画化され、地理化されているわけである。

さて、保留しておいた作中の《唐山のむかしの繪本》の同定であるが、具体的には『仏国禪師文殊指南図讚』のことを指しているようだ。「善財」発表の数ヶ月前に文芸雑誌『文芸往来』（一九四九・四）に「石川淳訪問記」という記事（文責は《本誌記者》）が掲載されたが、世田谷区北沢の石川の住まいを訪れた記者の報告の中に、次のように記されている。

「略」君に珍らしい本を見せよう。」とそれまで何の話をしたのか跡をも止めぬような具合に先生はすつと立上ると一冊の古書を渡された。宋版か元版かその貴重な書籍に向つて、わたしはその名だけを心に記したのである。「仏国禪師文殊指南図讚」（五六頁）

この「仏国禪師文殊指南図讚」は、善財童子の善知識歴訪について善知識一人につき一面（半丁）を費やし、その各面ごとに善財童子が善知識に掌を合わせている繪を一枚載せる《繪本》仕立ての書物であるが、「善財」発表との時間的距離から考えて、これが作中の《唐山のむかしの繪

本》に該当することはまず疑いあるまい。

中国では逸書となつてしまった同書だが、宋版が大東急文庫に所蔵されているほか、諸本の存在が知られる<sup>(6)</sup>。しかし、石川所蔵のものがどのような系統に属するかについては、現物が確認できない状況のため全く不明である。ここでは、作品本文中の《可憐な童子の掌を合はせてゐるところが多がいてあるのを、あやしく身にしみるけしきとして、もとから心にふかくとどめてゐた》というその《可憐》さにいささかフェイシステイックにこだわつてみたいという趣旨から、東北大学が所蔵資料としてウェブ公開している和刻本を図版で紹介しておきたい（次頁を見よ<sup>(7)</sup>）。石川所蔵本との正確な一致は期待できないが、同書の繪図は比較的忠実に覆刻されて来た印象があるので、近似値として眺めることは許されよう。

図版で見れば、髪を総角にして、文殊菩薩の前で掌を合わせる善財童子は、確かに素直で一途な愛らしい童子である。数えて二一歳の宗吉とはギャップがあるとも言えるが、前章で見たようにシンプルな行動原理で動く一途でナイーブな存在として設定されていたのが宗吉であるとすれば、このような善財童子のイメージもまた宗吉のそういう一面幼いとも見える性格を補強するものと見るべきなのであろう。

さらに、宗吉のそのような特徴を善財の悟りに向けての仏道修行と突き合わせてみると、公平を重んじる《いやだ。》は、仏教的な《無差別》に通じるだろうし、他方、舌の敏感さは、現象《色》に囚われている衆生性の現われであり、修行により克服されるべきことがらとなる。作品末尾近くでその舌の敏感さをいくらか克服したように見えるのは、宗吉が街中を放浪しつつ多少とも修行を積んだということになるのか。

さて、本文の展開に戻ろう。



東北大学附属図書館蔵「仏国禪師文殊指南」より  
善財童子（左下）が最初に文殊  
師利菩薩に掌を合わせる場面

《根本智／後得智Ⅱ方便》の話を踏まえつつ、宗吉は《愛》の問題にスライドさせ、《すると、愛はどうだらうか》（四二二）と問いを立て、《自分のたつた二つの恋愛体験に於て》、すなわちオカミとの性愛と伊奈子への想いとという二つの恋愛体験を通して、その通りだと信じる。後得智とは《真如平等を体得した根本智の後に得る、現象界の差別相を正しく認識する智慧。教化済度に向かう智慧》<sup>(18)</sup>のことである。この後得智の論理に従えば、既に《根本愛》を体得したオカミが、教化済度の振る舞いとして愛の方便を宗吉に施したということになるだらうか。宗吉自身は、根本智ならぬ《根本愛》を最終的な到達目標として歩み出すべき段階にあることは言うまでもない。

この構図に基づいて《はじめて稲富伊奈子を見たとき、なにを感じたか。そのとき漠然と感じたもの、その後一途におもひつめてゐたもの》、これまで《自分では何ともいふすべを知らなかつた》ものについて、《それはつまり伊奈子に於て愛の文殊を見たといふことにほかならなかつたと、はにかむことなく今はいへた》という認識に至る。

はじめそれを漠然と感じたのは、けだし肉体の純潔に対応するところの、をささない発想だらう。そして、その漠然たるものに言詮をあつたへえたのは、昨夜の事件ののち、たちまち純潔をうしなつた今である。肉体の純潔とは、せいぜいまぐれあたりがこの転変の作用をするにとどまるものであり、たつたこれだけの作用に於て完全な意味をもつものであり、ほかには何の意味ももたない、あほらしいものだときとつた。（四二二、四二三）

《肉体の純潔》というのが、女性への恋慕を始動させる（いずれ捨てられるべき誤つた暫定的な）仮説であり、それを失つて初めて恋慕の真相とも言うべき《根本愛》Ⅱ《愛の文殊》を認識するに至る、というふうに言い換えられようか。

《今になつても、いや、今になつてこそ、伊奈子はあきらかに愛の文殊であ》り、《昨夜の事件は愛をその根本に於て傷つけるどころか、かへつて愛のくもりを払つて、肉体といふ方法に依つて、はじめてよく愛の何たるかを垣間見たやうなぐあひである。たしかに、宗吉は昨夜の女を愛したといへた。それは伊奈子への愛と、愛に於て一つであつた》ということになり、オカミへの愛と伊奈子への愛とが同次元のもの、同一のものとして認識される。

そこに肉体が介在していることから、《肉体は愛の方便なのだらうか》との問いかけがなされ、《それならば、肉体はけしからんといふ道德的心配ほどワイセツなものはない》とワイセツが話題に上り、《じつに肉体のワイセツなるがままに淫欲は道なのだらう》というところまで思惟は到達する。

かくして、《淫欲ハ即チコレ道ナリ》なる命題は、《根本智Ⅱ文殊／後得智Ⅱ方便》という構図を、《根本愛Ⅱ伊奈子／愛の方便Ⅱオカミ》へとスライドさせて、《肉体の純潔》／《ワイセツ》という対立概念を止揚する《愛の弁証法》とも言うべきものにまで宗吉の思惟において練り上げられた<sup>(19)</sup>。

その思惟は次のように行動に向かおうとする。

宗吉はワイセツなるがままに、突然はげしく伊奈子の肉体をもとめ、愛の文殊の場まで行く道をもとめた。飢渴であつた。何のため

に陽根があるのか。勃勃として今はふれるものを撫で斬にするいきほひであつた。(四二二)

だが、思惟は所詮宗吉ひとりの思惟でしかなく、愛には現実の相手が必要であり、現実において思惟は所詮仮説でしかないだろう。宗吉お得意の《錯覚》とも親和性が強い。《愛の文殊の場まで行く道》は平坦ではなからう。

### (3) 伊奈子との再会

思惟は前節で見たようなところまで到達したものの、目指すバクダン屋にはなかなか到達できなかった。《軒と軒とのあひだの、通りがかりには気のつかないほどせまい木戸》(四二四)に偶然気付き、その奥に目当ての店を見付ける。

伊奈子の登場場面は、次のような颯爽たるものである。

そのとき、梯子段の上に音もなくすつと立つたひとのかたちの、はじめに伸びた脚が光つた。槍を突き出したやうな、はだかの脚である。ふり仰いだ宗吉の目のさきに、裳をひるがへして、たたたたと踏みおりて来たのが、しぜんにすきを見せない姿勢で、まつすぐに壁ぎはの棚にすすみ寄つて、ビールの壘を二本つかみとると、また梯子段に舞ひあがつて行つた。(四二五)

陸軍少将令嬢だった伊奈子の、新橋のヤミ市のヤキトリ屋でてきばきと立ち働く姿。それを見て宗吉はどのように反応したか。

みごとに、媚が無かつた。そのしなやかな脚の肌にも、まじりものの無い血の色がにほつた。純潔。夢の中の伊奈子と寸分のくるひもない伊奈子がそこにゐた。宗吉はひどく興奮した。夢と実在とがこの生身の肌に於てびつたり一つに合はさつてゐるとは、何といふことだらう。突然地球の回転が止まつたやうであつた。体のかはしやうのない刺戟である。宗吉はその刺戟をまともからだを受けて、猛烈にワイセツなきもちでいつぱいになり、腰掛を蹴はなして、脚の白さのあとを追つて、たたたたと梯子段を駆けのぼつた。(四二五)

語り手は特に指摘していないが、これは宗吉お得意の《錯覚》ではないのか。《みごとに、媚が無かつた》とあるが、そもそも伊奈子はまだあの宗吉だと気付いてはいない。《夢》と《実在》との一致を言うが、《夢》はともかく《実在》はどう保証されているのか。むしろ、そこにいる生身の伊奈子を《夢の中の伊奈子と寸分のくるひもない》と《夢》のほうに引き寄せて見ることしかできないでいるということではないのか。

このあと宗吉は伊奈子に名乗り出て、一気に、『ほく、とてもあなたが好きだ。』(四二六)と告白にまで至る。これは宗吉が夢の中で、何度となく繰り返してきた告白の言葉だったが、『さう。』／冷淡と聞えたほどに、伊奈子はほんやりと答へた(四二七)だけであり、やり取りを聞いていた常連客からの冷やかかしへの伊奈子の対応の仕方は、『やけに蓮葉な調子で、どうも純潔といふのとはちがふやうにひびいた。』にもかかわらず、『宗吉はもう耳が鳴つて、それ「蓮葉な調子」を聴きわけるひまなく、堰を切つたいきほひで、一気に伊奈子を抱きし

めようとしたのを、なに、器用にさばかれて、壁ぎはに引き寄せられ、腰掛をあてがはれた》。

伊奈子は、如才ない客あしらいの一環で宗吉にも対しているに過ぎないのだが、そのことに宗吉は気付かず、ガラの悪い客に舐められないような言葉遣いを繰り返していることにも気付けない。《錯覚》だけではないか。

泥酔からやつと醒めて店を離れるときに、この《錯覚》は頂点に達する。店先まで見送って来てくれた伊奈子から既に終電車が出てしまったことを知らされた宗吉は、《伊奈子さん、行かう。ふたりでいつしよに行かう。遠くに、ずつと遠くに。海でも山でも。》(四二九)と夢のようなロマンティックな誘いかけをするが、伊奈子は《あなた、お金もつてる。》《もう遅いわ。そんなに遠くへは行けないわ。この近所に、泊まるどころあるわよ。行くの、ホテルへ。》と冷静に、現実的に応じる。

ホ、テ、ル。何といふ発音の仕方だらう。それは媚よりもわるかつた。閨房の肢体のうねりが露出して、典型的にワイセツであった。クモの巣のやうなものがそこにねばつた。伊奈子ではない別の女がいつのまに拘りかはつてゐたのか。異変であつた。宗吉はこの異変には堪へられなかつた。(四三〇)

宗吉は目の前の現実の伊奈子を直視できないでいるから、《伊奈子ではない別の女がいつのまに拘りかはつてゐたのか》としか捉えられない。

「いやだ。」

声とともに、手が女の肩を突きはなした。とたんに、逆にこちらの胸を突きかへされた。はつとした。自分の手で自分の胸をついたやうであつた。(四三〇)

語り手は基本的に宗吉に内的焦点化しており、これまで見て来て明らかのように、宗吉の《錯覚》を上から目線であからさまに指摘することはなく、ただ、宗吉の認識不足や会話の食い違いから、読者が宗吉の《錯覚》に気付けるようになっていた。しかし、ここに来て、宗吉に自身の《錯覚》ぶりについて多少なりとも気付かせようとしているかのようである。《自分の手で自分の胸をついたやうであつた》とは、宗吉の独り相撲、想像上の伊奈子と対話しているだけで現実の伊奈子に向き合っていない独り善がりへの気付きとも取れそうだ。

宗吉に《いやだ。》と拒絶された伊奈子は、《ばか。》と返したあと、店に帰って行ってしまうが、その帰り際の場面は次の通り。

内側から木戸をほそめにあけて、半身をさしのべて、まちかく追つた宗吉のはうに、

——Come again.

宗吉がひとびでそこに殺到したとき、がちやん……あやふく鼻を突きあてるほど、みごとに木戸が締まつた。その音の消えたあとは、くるぐるとして、物のうごくけはひは無かつた。(四三〇、四三一)

この《Come again》という言葉は、文字通り「もう一度、おいで。」と

誘いかけの言葉とも、「来られるものならもう一度、来てみる。」という腹立ち紛れの挑発・捨て台詞とも受け取れる。この表向きは誘いかけを意味する言葉が、このあと拒絶の言葉として呪文の如く宗吉に作用することになる。両義性によって、アイロニーによって、あるいは言語行為論的に言うならば表面的な意味と行為遂行的な意味とのズレによって、宗吉を呪縛することになる。

宗吉の拒絶に対して『「ばか。」』と返し、続けて『Come again』という言葉とともに木戸の内側へ消えてしまった伊奈子のこの一連の言動には唐突さが否めず、言葉の両義性とも相俟って、伊奈子の内面は必ずしも分明とは言い難い。ただ、登場人物の内面という水準ではなく、物語の展開構図という水準でなら、求道の発端で文殊に会って善知識歴訪を促された善財童子が、修行の完成を意味する普賢との邂逅直前に文殊に〈再会する〉という善財童子の物語とオーヴァラップさせる形で、伊奈子の「もう一度、おいで。」という言葉に、たつぷり（愛の）修行を積んでから店を再訪せよ、という意味合いを、読者が読み取ることはできよう。

むろん、そのような意味合いの言葉が、しかし、なぜ英語で発せられたのかという疑問なども依然残る。そのあたりをどう理解すべきかについては後段で改めて考えることとして、宗吉サイドの思惟・言動を引き続き追ってゆこう。

#### (4) 『Come again! がちやん。』

小説は「五」に入ると視点人物が変わり、それまで篤宗吉だったのが、志方大吉に内的焦点化することになる。すなわち、宗吉は外側から、志

方の眼差しを通してしか描かれなくなる。

芝浦に着いた翌日の夜、木戸のところではねつけられた後、宗吉は『行方不明』（四三二）となり、バクダン屋の常連客の噂では『毎晩のやうにこの界限に酔ひしれて、いつもちがつた女をつれてゐるのを見たとか見ないとかいふ』（四三五）。四月末、志方はようやく宗吉を見付けるが、『肩の肉がげつそり落ち』『髪はみだれ、色がどす黒く、頬がこけて、その頬の上に一筋なまなましく「略」血をふいた傷痕があ』（四四二）るような荒んだ風貌に変わり果てていた。

一月から四月末までの間に何があったのか、作中、詳らかに語られることはないが、あれだけ『舌の感覚が非常に鋭敏』（三九六）だった宗吉が『舌が堰かうと堰くまいと、世の中にはうまいものがあり、まづいものがある以上、まづいものだつて、のどを通る権利があるだらうぢやないか。いや、いつのまにか、気がつかないうちに、今ではそれがしぜんにのどに通るやうになつた。まづいものは、まづいままに通る。それだけのことだ』（四四四）と言い放てるようになっていたところに、従来の世界観・行動原理を修正せざるを得ない肉体的・精神的経験の蓄積が想像されよう。風貌の荒み方から考えれば、具体的にはパンパンたちの用心棒みたいなことをして多少の修羅場をくぐって来たというあたりが実情だろうか。

『伊奈子が好きなんだらう』という志方の問いかけに、『好きでないとはいはない。ただ伊奈子のところへ行く道がふさがれてるんだ。』『木戸だ。ぶつかつて行くと、木戸が、鼻のさきにながちやんと縮まるんだ。もどらうとすると、Come again! また駆け寄ると、がちやん。Come again! がちやん。Come again! がちやん。永遠に、Come again! がちやん、なんだ。』（四四五）と言う。志方が言うように、『ベ

らぼうな。あんなべらべらな木戸一枚、たたつこはして、はひればいいだらう》はずなのだが、宗吉にとっては《鉄壁》なのである。

物理的な問題ではなく、心理的な問題であることは明かであるが、読者はこれをどのように受け止めれば良いのだろうか。

伊奈子の側は、宗吉をどう見ているのか。かなり泥酔している伊奈子が志方に語った言葉だが、《迷惑さ。あいつ、なまいきだよ。おそく、どこかで酔っぱらつて来て、木戸口からどなりこんだりなんかして……笑はせるね。チンピラのくせにヨタモノきどりでき。うるさいつたら、ありやしない。》(四三八)、《ヤケ酒だらうね。あいつ、あたしにむかつてへんなこといやがつたから、こつびどく刎ねつけてやつた。それでも懲りないんだよ。まさか、あたしがねえ、あんなものど……をかしくつてね。今度来たら、水ものませないで追っぱらつてやる。》

このあと、志方を送って店をちよつと出たところで宗吉を見かけて、《宗ちゃん》(四四一)と呼びかけて追いかけてしようとした場面などからも、伊奈子が宗吉を気にかけていることは間違いないが、宗吉が現状のようなアプローチを続ける限り、伊奈子の側から良い関係に持つて行くのは難しそうだ。やはり、宗吉がそのまま伊奈子を《錯覚》無しで受け入れ、自力で心理的障壁をクリアするほかないのだろうか。

### (5) 《灯の無いホテル》

伊奈子にははねつけられてしまう宗吉だが、《パンパン》の女たちとは《附合があるらしい》(四四三)。

最初のきっかけは、終電を逃し、《行くの、ホテルへ。》(四三〇)と伊奈子に尋ねられた時の(相互)拒絶の直後、《すつと掠め寄つて来た

影》に《おにいさん、あそばない。》(四三一)と声をかけられたことだった。

女ではあつた。いや、夜目にも美しいといへる若い女でさへあつた。しかし、ふれて来たその手、もたれて来たそのからだは、戦慄するほどつめたく、ほとんど金属に似た。なにをあそばうといふのだらう。あそびを知らない物体の衝突であつた。

「どこへ行くんだ。」

「ホテル。」

ホ、テ、ル。その発音までがつめたくひびいた。媚も、ワイセツも、じつになにも無かつた。

同じ《ホテル》という言葉の発音の違いに象徴的に示されているように、《媚》や《ワイセツ》の有無など、すべてが伊奈子と鮮やかな対照を成している。

この段階では、《むしろ安んじて、行く道をまかせるにたれるだらう》と導かれるままに、《灯の無いホテル》に向かう。まるでこの女も一人の《覚者》であるかのように。

実際に、空の星くずが一かけら、こぼれ落ちて来て、ひよつとふところに宿つたやうであつた。名もない星のかけら。可憐であつた。宗吉は力をこめてそれを抱きしめた。女の小さい靴が、その裏に金具が打つてあるのだらう、凍つた道にあたつて、夜の底にかちりかちりと鳴つた。(四三二)

硬質的な何とも美しい場面ではあるが、伊奈子との衝突の反動からこの美しさ・可憐さに逃げ込んでいる限り、宗吉は前に進めないということだろう、四月末に志方と再会し、『おまへもちかごろはパンパンの五人や十人、附合があるらしいな。そいつらのところにも行くのか。』と尋ねられて、『灯の無いホテル。』『あいつらのところに行くといふのは、どこにも行かないといふことだ。』(四四三)と答える。

なお、この《灯の無いホテル》という形容、イメージは、おそらく先行作「無尽灯」(『文藝春秋』一九四六・七)でも取り上げられていた「維摩経」由来のものである。「無尽灯」から引いておく。

それにしても、この女人の倒れてゐるところはあまりに暗かった。その手に灯を挑げもたせなくてはならない。そこに一灯がともれば、火は女人から女人へと、つぎつぎに移されて行き、伝へられて尽きず、いつか女人といふもののすがたを分明に照らし出すかも知れない。維摩が女人にむかつて無尽灯の法門を説いたのは、けだしゆゑあるのだらう。(『石川淳全集 第二巻』筑摩書房、一九八九、四四二、四四三頁)

このように「無尽灯」にも採られた無明の闇を照らす灯を次々と継承してゆくイメージと善財童子が《覚者》を歴訪して進み行くイメージとが重ね合わせられたところに、「善財」の《灯》のイメージが成立している。もつとも、宗吉が順調に前進できないため、《灯の無い》と、ネガティブな表象、欠如態でしか提示されていない。

以上、この章では、この小説の物語的展開のための一番大きな柱と

言つて良い《愛の論理》あるいは《愛の弁証法》とも言うべきものについて、典拠確認等も交えながら検討してみた。

オカミとの《愛の方便》的な体験により《肉体の純潔》原理から解放された宗吉が、《肉体》の《ワイセツ》を肯定するようになり、すなわち精神的に憧れるだけでなく肉体的にも伊奈子を獲得したいと思ひ定め、《愛の文殊》たる伊奈子への到達を目指し始めたものの、到達できないまま足踏みしているというその姿を確認した。

現実の伊奈子は、男女の性愛の肯定にとどまらず、媚態も含めた一種性的な駆け引きを駆使できるところまで進んでいた。伊奈子のそんな姿は、予想・《錯覚》を越えたことで、宗吉はとても付いて行けず、《ワイセツ》として拒絶することしかできなかった。つまり、宗吉の《肉体の純潔／ワイセツの止揚》の進み具合はまだまだ中途半端だったのである。《槍を突き出したやうな、はだかの脚》(四二五)を光らせて宗吉の前に再登場したバクダン屋の伊奈子は、『ばか。』と宗吉を罵つたあと、『宙にひるがへつて、白く、しなやかに、光り飛ぶその脚』を見せて、『宗吉が追いつかないうちに』(四三〇)木戸の中に飛び込む。既に奪回すべき《金羊毛》と擬せられ、ここでさらに宗吉が追うべき《光》として莊嚴された伊奈子は、《速さ》も兼ね備えていたのだ。逃げ足速く変貌してしまつた伊奈子だが、その目の前の伊奈子を全肯定し、受け入れられない限り、《愛の文殊》の場まで行く道(四二三)はほど遠い。

舌の感覚の変化もあり、またパンパンとのつきあいも生じ、宗吉の世の中を眺める視野の拡大・成長もおぼろげながら窺える。だが、こと《愛》の問題については、いまだ足踏み状態、作品末尾で、志方から離れて《季節には気の早い燕の飛ぶやうに、かなたに走り去つた》宗吉にも速さ・身軽さは窺えるものの、《光》に向かえず、『まだ夜明にはほど

ある闇》(四四六)、無明の闇の中をいたずらに飛び回っているかのような宗吉であった。

次章では、他の重要な《覚者》、人間的スケールの大きさにより物語に広大な奥行きを与える志方大吉と、戦中から戦後への転換を生き抜く凡庸な俗人を代表する大草南翠・千木千春の二人について見ることにしたい。

### 第三章 海の論理・陸の論理

#### (1) 海の論理―志方大吉

志方大吉は、房州南端で漁業を営む筧家と関係も深く、五郎丸を操って宗吉を東京に運ぶだけでなく、宗吉の保護者あるいは後見人としての役割も果たしているが、宗吉にナイーブでシンプルな世界観・行動原理がはつきりと付与されていたように、大吉にも特徴的な世界観・行動原理が付与されている。

そのまず第一は、《海の論理》とも呼ぶべきものである。

志方大吉にとつては、世界は海でしかなかった。陸はといへば、ときどき酒と女とを補給するための足だまりであり、それ以外にはじつに何の取柄も無い泥のかたまりにすぎなかった。海にはしぜんに塩と魚とがあるやうに、陸にはしぜんに酒と女とがあつた。たつたそれだけの、非の打ちどころなき無学な認識である。したがつて、世界観のふところはたつぷり広がつた。海にあつては、船の行くところが道である。船長として、志方は道そのものであつた。道

なんぞ、どこにあるのか考へてみたこともなく、どこに行くべきか探してみたこともなく、船商売の都合に依つてあたへられた方向にほとんど勝手に運動した。運動の限界は海のはうがきめてくれるので、これも心配はいらなかつた。(四三三、四三四)

実に単純明快な《世界観》であり、この《海の論理》により《陸》は貶下されること甚だしい。

海さへあれば、生活はあつた。しかし、陸ではさうはゆかない。陸には浮かぶべき船は無かつた。汽車とか電車とか自動車とか、何といふ野暮くさいしろものだらう。たかだか爪で地べたを引つ掻いてゐるだけではないか。それにまた、二本の脚でてくてくあるくといふ操作は、何といふ愚鈍な這ひまはりだらう。涙が出るほど滑稽ではないか。山の上からながめても、地上にはなにも浮かんでゐるものが見えない。ものうごきが人間の生理のワリツケから抜け出せないでゐるせむだらう。ぜんぜん粹なところが無い。粹でないやうな運動といふものがあるだらうか。志方は陸にあがると、どこにも浮かびやうが無いといふことでうんざりした。道の案内が皆目わからず、ここを通れとか通つてはいけないとかいふ七めんだうな交通規則には、なほさらうんざりした。道なんぞあるいちややらねえ。志方はどこにも行かないことにした。(四三四)

このように《海》との対比で《陸》が相対化され、徹底的に批判・否定されている。

例えば海洋小説の代表作であるハーマン・メルヴィル「モウビー・

ディック（白鯨）（一八五二）の冒頭近くで語り手のイシュマエルが、人が皆奴隷でしかない（陸）のシステムから逃れて水夫として（海）に行く、そのやむにやまれぬ思いについて述べているが、志方の（海の論理）もそういったものと通い合う、まさに一箇の確たる《世界観》である。

では、そのような《海の論理》から志方は戦争をどのように経験したか。

志方は今でこそ四四・三九噸のぼろ船に乗ってはるが、いくさのあひだは運送船に乗って何度も遠く南の海に往復した。そして、海上の体験からえた勘に依つて、空の雲行を見るやうに、いくさの雲行に見きりをつけることでは、たれよりも早かつた。航海のたびかさなるにつれて、負いくさ、いよいよびんと応へた。げんに、最後の航海には、乗組の中でまつさきに船に酔つたのはじつに火夫であつたといふことを目撃させられた。ひとだねが切れて、しろうとを狩りあつめた証拠である。勝手にしろ。志方は船長室にふんぞりかへつて、自分は酒に酔ふことにきめて、海軍の月給取にむだのみされるはずの上等のウイスキーを幸便に手酌であふつて、をりしも都合よく船は戦闘機の機銃掃射のために大穴をあけられたが、心のこりの一壘もあまさないままでにのんだくれた。この男にとつて、いくさは、船でふんだんに酒がのめたといふことのほかには、何の意味ももたなかつた。したがつて、負いくさのちは、今度は酒をのむ場所が陸にうつつたといふだけのちがひになるのだらう。（三九四、三九五）

この豪放かつ単純な男にとつて戦争はこのようなものでしかなかった。

宗吉には、既に見た通り《舌の感覚が非常に鋭敏》（三九六）という特徴があつたが、この点、志方はどうなのか。

のむこと、くふこと、一気呵成のめざましい早業で、ゆつくり味はふなどといふ間のぬけたことはしない。口はただ胃の腑に物を送りつける通路にとどまり、したがつて舌は無きにひとしく、その代りにたつしやな歯がそこにあつた。「略」口にはひるものならば釘でも「御馳走」なのかも知れない。つまり、この男にはまづいといふものが無かつた。すべてがうまいものであつた。（三九八、三九九）

この通り、実に明快に宗吉とは好対照を成している。

では、宗吉が《愛》をめぐつて足踏みしている（女性観）のほうはどういうものだろうか。

四月の末、バクタン屋に飲みに来た志方は、《宗吉と伊奈子とのあひだに何事がおこつたにしても、おこらなかつたにしても、デマにしろ失恋にしろ、あるひは失恋でないにしろ》《どうでもよかつた。つまりねえ、世間にさらにあら》としか思わなままに、酔つてもたれかかつて来る伊奈子を眺めて次のように感じる。

伊奈子。こいつ、いつたい何だらう。志方の目はいつも女しか見なかつた。あの女、この女、いい女、わるい女、その他いろいろ……さういふけじめをきれいに知らなかつた。女に附いてゐるそれぞれ  
の味は、アルコールに附けられた味と同様に、これまた志方の理解

の外にあつた。その理解の外に、じつに何物もありうべからざるところに、なにがごたごたもつれようと、いやはや、はなしにならなかつた。志方は腕の中の女をちつと見直した。なんでえ、こんなもの、どこにでもころがつてら。こいつでなくても代りはいくらもある。志方は陸にあがつた夜ひとり寝るなどといふあほなことはしない。どうせ今夜もどれか女を一箇抱いて寝るにきまつてゐる。あの女でもよし、この女でもよし。それがこの伊奈子であつても、わるいといふことはなかつた。(四三九、四四〇)

くだくだしいパラフレーズは無用であろうが、《代りはいくらもあら》という言い回しに端的に示されているように、伊奈子という特定の人を絶対化したまま身動きが取れなくなっている宗吉とは正反対である。

作品末尾のところ、宗吉に向つて志方は《おい、海に来いよ。おれといつしよに船に乗れよ。》(四四六)と誘いを掛ける。宗吉の返答は《遠すぎる。》というもので、志方は深追いはしないが、《おい、海に来る気になつたら、いつでもおれのところに来いよ。》と声をかける。対伊奈子問題を解決できないまま作品は幕切れを迎えるが、この最後の台詞は、作品の全体的な印象として一種の解放感を、ゆつたりした奥行きを与えてくれている。この最後の章「五」が、語り手が宗吉に内的焦点化していた「四」までと異なつて志方に焦点化していることもあり、右往左往するばかりで前に進めない宗吉の姿を志方が暖かく、大きく包み込むように見守る遠近法となつてゐる。

以上、志方の《海の論理》、戦中の振る舞い、味覚観、女性観と見てきたが、あらゆる意味で宗吉と正反対であり、敏感／鈍感というだけで

なくスケールも違う。これほど正反対な人物を、しかし巧みに組み合わせることで宗吉の行く末に樂觀を生み出しているところに、作品世界を創り出した石川の絶妙なバランス感覚が窺えよう。<sup>2)</sup>

## (2) 陸の論理——大草南翠と千木千春

前節では物語世界を相対化し広大な奥行きを与える人物的スケールの大きい志方大吉について見た。この節では、志方とは対照的な小者ながら、時代状況を戯画的に体現するという意味では無視できない二人の脇役について確認しておこう。

まず、宗吉の大井町の下宿先の大家である大草南翠。

《かつて宗吉の父が、今は焼けてしまつたが、東京に事務所を建てたりに、その地所の周旋をしたのが南翠で、それが附合のきつかけ》(四〇五)なのだが、経歴も職業もはっきりしない。《楽隠居》(四〇六)のように超然と暮らしているようで、《以前手形のサギかなにかで一年ほど懲役に行つたことがあるといふはなし》もあり、宗吉としても初対面時の《囚人といふ第一印象》(四〇七)がいつまでも抜けきらないようなどこかうさんくさい人物である。

戦争中はオモトの鉢をたくさん並べていたが、敗戦後の現在は、硯をたくさん扱っている。このオモト(万年青)から硯への推移にどのような意味合いが託されているのだろうか。

宗吉の部屋の床の間に、戦争中は南翠が用意した《忠孝》(四一一)という軸が掛けてあり、宗吉は迷惑に感じてこの掛け軸を外し、代わりに《世界地図》を貼つておいた。視野狭窄の国粹的な徳目に代えて広い視野の確保を志す宗吉の見識が窺えるが、敗戦後に来てみると掛け軸

は、『春従春遊夜専夜』（春ハ春ニ従ヒ夜ハ夜ヲ専ラニス）に替わっていた。高名な白居易「長恨歌」の中の一節で、楊貴妃が玄宗の寵愛を受け歓楽を尽くすさまを詠んだものである。だが、宗吉は『流行の切替といふやつにちがひない。南翠もまた現実に再適應したものとみえる』と眺めている。『流行の切替』とは例えば、一九四六年二月に急遽断行された「新円切替え」などを思い起こせば良いだろうか。この敗戦を挟んだ『切替』『再適應』ということ踏まえれば、オモトは戦時下への適應だったわけであり、硯が敗戦後の「文化国家」云々の唱道——詳しくは後段、千木千春を見る際に触れる——を踏まえた「文化」の象徴であり、対するオモトはその葉の形状（特に「劍葉」と呼ばれるタイプのものは刀劍状）から「戦争」「尚武」の象徴だったのではなからうか。

それにしても、ほんの掛物をかけかへたぐらゐることで、オモトの代りに硯なんぞをいじつて、今日の急変の世の中にあわてふためきもせず、結構かはらない顔をしてゐられる南翠の生活といふものはどこに根を据ゑてゐるのだらう。このかはらない顔は時勢のながれがどうかはらうと、いつも荒い風あたりをよけた隅のはうに、ずぶん執念ぶかく無限につづきさうに見受けられて、そのことがどうも不合理としかおもはれなかつた。不合理。たしかにそれはサギに似た。もしこの生活をどこかで支へてゐるものが実際にサギであつたと判明したとしても、意外ではないだらう。むしろ、どこかでサギをはたらいてゐるかとうたぐらせるやうなところに、この生活の根はあるのだらう。（四一一、四一二）

宗吉はこのように判断する。ヤキトリ屋に転じた稲富少将の適應ぶりへ

の嫉妬を表明してみせたりはするものの、敗戦を挟んだ世の中の激変にほとんど動揺も見せずに適應してしまうこの怪しい人物は、しかし、特殊なというよりはむしろ敗戦後の一つの典型的な人物だったのでなからうか。

この『無口』（四〇七）な人物に対して、次に、饒舌多弁な、これもまた敗戦後の一つの典型的な人物と思しい千木千春について見よう。

宗吉が通っていた宗教大学の英語講師だった千木は、『いくさのあひだ商売であるはずの英語の講義はそつちのけにして、もつぱら流行の勇壯活潑なる演舌を得意とし』（四一三）ていたが、『その憂国の演舌はおほむね懐古的にかたむいて、志士仁人の実例としてあげるために幕末に於ける刺客侠客の徒の伝記を説き、内容語調ともに浪花節に似てただばかばかしく、聴くものの心に何のしるしもつけず』（つまり、この教師は規格版の道義を配給しようといふ善意にも係らず、ちとの害毒さへながすことができないうやうな人物であつた）（四一四）。

敗戦後は、株で儲け（ただし、のちに志方が訪問した時には失敗していた）、《今日になるとおれの英語はめきめきものをいひ出して来た。ついでにこないだも、渉外上の用件であちらのひとに逢つたがね、じつにべらべらなんだ。おい、おれがべらべらなんだよ。立派に用がたりちやつた》（四一九）と実用英語が役に立ち、となかなか調子が良い。

戦中の浪花節については、『戦争中の保身術』（四一七）、『必死の滅私奉公、じつは小人のばたばたで、清水次郎長とか桜田血染雪なんぞの戦時版をもつて、夢中で御機嫌をうかがつた』（四一八）と、戦時中の振る舞いが『保身』のためであったことを隠さない。学生からの渾名は『ツクダニ』（四一三）で、雑魚を煮詰めた、メインディッシュにはなり

得ない食品の如く、あっても良いが無くても良いという無害な小者ぶりから来たものだろうか。

ただ、《今後も都合次第で、まただれかの御機嫌をうかがふこともあらうといふものですね》と宗吉に言われて、《こいつ、やつぱり清水次郎長だな。文化版を発行したいね》《だって、民主主義の日本の意味は今日でもあひかはらず清水次郎長界隈をふらふらしてゐるんぢやないかね》(四一八)と応じているあたりは、敗戦後の時代状況の捉え方として少々興味深い。日本人としての民主的主体的な選択よりもマツッカーサーという「親分」の「善政」「名裁き」を期待するような大衆状況<sup>(23)</sup>に対する石川の皮肉が託されていたのかもしれない。

《道はおのづからひらけるものです。道は努力したところに見つかるものぢやないんですか。》(四二〇)と宗吉からまじめに尋ねられた千木は、《おれはただ株と浪花節文化版と非クラシック英語とをもつて、どうやら今日に生きられさうな道のほとりに進出したといふだけだ。《道は在るときめられたところに在るさ。》《道なんぞは規格版にまかせておけばいいぢやないか。それが小人の道だ》と答えるだけであり、世の大勢を敏感に察して《食ひつばぐれは無い》生き方を続けてきた千木の処世術が偽悪的に語られるのみである。

ところで、今見たところにも《浪花節文化版》(四二〇)とあったが、先ほど見たところにも《清水次郎長の》文化版を発行したいね》(四一八)とあったし、他にも《なんだか文化人の仲間に入れてもらつたやうな気がする》(四二〇)とか、《きみのお父さんは文化事業に出資はしないかね。じつは出版をやらうといふプランがあるんだ》と千木は《文化》の語を振り回しているが、作品の前の方で宗吉のあり方を語る中に《貧棒くさい反省なんぞは御方便にも文化屋商売の不潔なおとなが一手に請

負つてゐる世の中になつてゐた》(三九二)とあり、ここと照応させるならば、千木は時流に合わせる《不潔なおとな》の一員たることを積極的に目指しているということになる。

千木のこのいささか滑稽な《文化》なる語の多用だが、敗戦後の政府要人が《武》から《文》へという安易なレトリックから「文化国家」という言葉を多用・濫用していた現実を踏まえたものであろう。昭和天皇が一九四六年一月三日の日本国憲法公布記念式典で発した勅語の中に《朕は、国民と共に、全力をあげ、相携へて、この憲法を正しく運用し、節度と責任とを重んじ、自由と平和とを愛する文化国家を建設するやうに努めたいと思ふ》とあったのはよく知られている<sup>(24)</sup>。こういう敗戦を挟んだ体制の大転換に、千木は饒舌に、南翠はむつつりと適応していたわけである。

宗吉の消息をつかむために千木宅を訪れた志方大吉相手にも《キリスト教に転向したばかり》(四三六)だの《民主主義者でありフェミニストでもある》、《公共の福祉のために》、《デモクラシーをとなへ》(四三七)だのと喋りちらかして、《このひと見しりをしない陸の人間の演舌語彙はなんのことやら》と辟易される。そもそも千木千春という頭韻を踏んだようなネーミングからも作者に大切にされていない戯画の人物であることは明らかだが、「陸の小人」として、しかし、敗戦後の時流を見事に浮かび上がらせるキャラクターにはなつていよう。

以上、本節では、大草南翠と千木千春と、片やむつつりと鈍重に、片や饒舌かつ軽佻浮薄にとの違いはあれど、戦中から戦後へと敗戦をまたいで巧みに生き延びる大人の姿を確認した。これら二人も宗吉にとつて善財童子が歴訪する《覺者》になぞらえられるべき存在なのであろうが、作中、善財童子の善知識歴訪の説明にあつた《啓発はむし

るえらくないやつ側から受けたといふ》(四二三)という例に該当するのだろうか。ともあれ、この二人の姿によって、戦中から敗戦後の体制・社会の転換とそれに対応する人間模様が浮かび上がる格好になっていたのである。

#### 第四章 現実の論理

前章まで、「善財」の主要登場人物の特徴を確認し、作品世界の構図の中での役割なども見て来た。

一種の求道性、《靈魂の振方》(三八九)への強い関心を持った若者・寛宗吉が、ナイーヴかつシンプルな世界観・行動原理でもって作中世界を動き回り、何人かの人物に出会って生き方について少しずつ学んで行くという展開であり、それが作品タイトル通り根本智を求めて《覚者》を歴訪する善財童子の物語に準えられているわけであるが、そういう成長譚・遍歴譚である中でも、特に《根本愛》Ⅱ《愛の文殊の場》Ⅱ伊奈子へ至ろうとする努力と葛藤こそが最重要部分であることは動かしようがあるまい。その意味で、《肉体の純潔／ワイセツの止揚》という課題を中心に据えた《一箇の青春の劇》<sup>(27)</sup>という読み方は間違いなく存在しよう。

しかし、そのような上澄みだけを掬ったような読み方で済ませ難い、上澄みの底の沈殿物とも不純物とも言うべき疑問の存在が稿者にはどうしても気になる。

疑問は三つあり、①宗吉にとって《木戸》が《鉄壁》として立ちほだかるようになった伊奈子の発した言葉が《Come again.》となぜ、英語なのだろうかという疑問、次に、②一九四九年八月に発表されたこの小説

の時期設定について、物語の発端が《昭和二十二年の一月はじめ》、終末が《四月の末》と非常に具体的であるのはなぜなのだろうかという疑問、そしてもう一つ、③なぜ宗吉は船で東京にやって来るのかという疑問、以上、これら三つである。

以下、これら三つの疑問点について考えることで、《一箇の青春の劇》にとどまらない、《時代状況との葛藤の劇》とも言うべきものがこの作品に組み込まれていることを浮かび上がらせ、別次元の読みの可能性を明らかにしてみたい。

##### (1) 《Come again. がちゃん》という《鉄壁》

この作品がGHQによる占領下の日本、主に東京での物語であることは言うまでもないが、作中、GHQ・占領軍の影はとても薄い。

数少ない言及を拾っておくと、まず、作品の始めのほう、志方の船が芝浦にやっと到着したところで、《ここは当時ほとんど外国であつた。町に出るためには、橋をわたらなくてはならない。橋のたもとには関所がまうけてあつた》(三九三)とあるのは、占領軍による港湾の接収<sup>(28)</sup>、官憲による密航者やヤミ物資の摘発のことを示唆しているのだろう。

もう一箇所、前章(2)に引いたが、変わり身の早い千木が自分の英語力の有用性をアピールする台詞中に《ついこないだも、渉外上の用件であちらのひとに逢つたがね、じつにべらべらなんだ》とあつた《あちらのひと》。ただ、抽象度が高い。前章で見た通り時流を見るに敏な千木だけあって、《キリスト教に転向したばかり》(四三六)というのも占領軍を意識していそうだし、《いづれ講和会議がすんで》(四三七)などといささか先走り感も強くうそぶいたりもするが、千木の認識の中で占

領・占領軍が意識に上ることが多いらしいとは言えても、それを作品全体に敷衍するのは難しそうである。むしろ、千木ばかりが意識しているという印象が強い。

あともう一箇所は、伊奈子とは対照的に語られる《灯の無いホテル》(四三二、四四三) イメージで語られる《パンパン》(四四三)たち。ただ、《パンパン》という言葉は、定義的に必ずしも米兵相手とは限らないし、仮に米兵相手だとしても、作中でその点が具体性を伴って描かれているわけではない。

GHQ・占領軍に関わる記述・表象はこの程度であり、作品全体として、占領下という条件を明示的に取り上げようとしているという印象は非常に希薄である。

にもかかわらず伊奈子が宗吉に向けて発した言葉がなぜ《Come again》と英語なのだろうか。占領下という条件を積極的に問題にしようという文脈が不在のために、甚だ唐突だという印象がどうしても拭いがたい。

いろいろな解釈の仕方が考えられよう。例えば、バクダン屋に米兵がやって来ることもあり(あるいは副業でパンパンもやっていて)、伊奈子は英語を使うこともあり、そのため宗吉相手の時にも思いがけず英語が出てしまった、というような解釈もあり得るかもしれない。しかし、そのための文脈が用意されておらず、また、宗吉の側で、伊奈子の口から発せられたその言葉が英語であることにこだわら様子もなく、そういう合理的な水準で理解して良いものなのかどうか、疑問が残る。

とすれば、作中世界の伊奈子から宗吉へ、作中人物どうしのやり取りの水準で合理性を持って発せられたというよりも、ある種の象徴性を持った特権的な言葉として、あるシグナルとして、むしろ読者に向けて

作者から発せられた言葉として、理解できまいか。

《愛の弁証法》が進展しない阻害要因、《愛の文殊の場まで行く道》が開けない最大の原因が、宗吉が目の前の現実の伊奈子を受け入れられないところにあるのは既に第二章(4)で見た通りである。敗戦を挟んでの伊奈子の変化・変貌を受け入れられないでいる、と言い換えても良い。敗戦前の初めて見た時の姿を忘れられず、敗戦後の打って変わった姿に付いて行けないでいるのだ。

そもそも伊奈子があのように変化・変貌してしまった最大の原因は日本の敗戦であった。そして、日本を敗戦させて、その後占領して、間接統治を行っているのは、米軍であった。そして、その米軍の使用している言語が英語であった……と、因果の連鎖をたどり直してゆくと、伊奈子が英語で言葉を発する一つの文脈が浮かび上がって来る。

これを要するに、伊奈子は占領者＝支配者の言語を発したのである。その意味で《伊奈子ではない別の女がいつのまにか拘りかはつてゐたのか》(四三〇)という疑念は、あながち《錯覚》とも言い難い。

当時、日本国内のさまざまな土地建物が接収されて米軍関係の施設と なっており、《Warning》《No Trespassing》《Off Limits》など、命令する表示は至る所で見入り、日本が占領下にあるという事実を絶えず国民に突き付けていたことであろうが、そういう言葉と本質的に同じ性質の言葉として、伊奈子の投げかけた《Come again》(四三二)という言葉は作用したのではなからうか。とすれば、宗吉にとって《鉄壁》と化すのも無理からぬことだろう。もちろん、《Come again》は誘いかけの言葉であり、決して排除・禁止の言葉ではない。だが、権力の言葉として、至上命令として、重たい。

作中、語り手が伊奈子に内的焦点化して伊奈子が視点人物となること

は一度もないのだが、行間を埋め、伊奈子の内面を想像しながら宗吉の《「いやだ。》》に対する彼女の《「ばか。》》(四三〇)から《Come again.》に至る反応を理解しようとすれば、次のようになるだろうか。

もともと宗吉のほうから《すきだ》と言ひ、《伊奈子さん、行かう。ふたりでいつしよに行かう》と言って来たくせに、その拒否、その《「いやだ。》》はどういうことなのか、自分もはや清楚ではなく蓮葉な女性に変わってしまったことを否認し、《「いやだ。》》と言うのであれば、こんな自分に誰がしたのか、なりたくてこうなったのではなく、敗戦で生活が一変したために仕方なくこうなったという当り前のことがどうして理解できないのか、と宗吉の判断力のなさを非難して発せられた《「ばか。》》という言葉。そして、すべてが敗戦のせいということであれば、敗戦という状況と不可分な占領軍の存在が視野に入つて来なければならぬ。自分がこのように変わったのは、英語を操る占領軍が駐留していることと切り離せないのだ、そのことをちゃんと理解してからもう一度やってみよう、という意味合いからの《Come again.》という言葉。《「ばか。》》が宗吉への非難の言葉であったとすれば、《Come again.》は宗吉(および読者)への理解力を試すなぞ掛けだつたということになる。

伊奈子の内面・思いが必ずしも分明に語られていないのは、敗戦国の矛盾を集約したような存在ゆえの分りにくさとも言えようが、おおよそこのように想像できる、いや想像しなくてはならないのではなからうか。

そして、伊奈子の《「ばか。》》《Come again.》という発話にこのような文脈の存在を想定するのに見合った形で、宗吉の《「いやだ。》》にも同じような文脈を想定するならば、どのように考えられようか。宗吉の《「いやだ。》》に、公平さ・公正さを遵守徹底しようとする倫理性が窺え

ることは既に第一章で見た通りである。《おおよそひとびとの不幸不運の分前の中で自分だけ特別にはづれるといふことがずるぶんさびしく、かなしく、それは不吉なことさへあつた》(三九二)のが宗吉であった。だとすれば、伊奈子の誘ひに対する《「いやだ。》》は、単に伊奈子個人への拒絶にとどまらず、伊奈子をあのように変えてしまった条件、敗戦、被占領、占領軍の存在という条件への拒絶ないし否認と見ることができよう。

そう考えると、第二章(1)の終りの方で見たように伊奈子を奪回すべき《金羊毛》と喩えていたのも、意味深長に感じられて来る。と言うのも、《金羊毛》はギリシヤ神話の王位継承に関わる秘宝であり、敗戦、占領といった体制の大きな転換と釣り合う比喩と見ることが出来るからである。伊奈子は、かように比喩性、象徴性を担っていたということになる。

このように見て来ると、伊奈子とは対照的にパンパンたちがあのように表象される理由も明らかになる。パンパンは、敗戦国の実情として敗戦後に発生したもの。そこには戦中と対比させるべき時間的変化の要素はなく、敗戦後の現象でしかなく、道の発見もなく、弁証法も生じないわけである。敗戦後の現象的な現実としてのパンパンの存在は受け入れられても、陸軍少将令嬢の女学生が敗戦を挟んで新橋のヤミ市のヤキトリ屋で働き始め、ガラの悪い客を相手に蓮葉に渡り合えるように変貌したという事実は受け入れられないのである。

しかし、このように心理的認識論的障壁をクリアできないでいる宗吉を、読者はただただじれたい思いで見えていなくてはならないのだろうか。頑張って早くクリアできるようにと応援しなくてはならないのだろうか。いや、むしろ、容易にその障壁をクリアできないところにこそ宗

吉の存在理由があるのではないのか。第一章で見たように、求道的で一途でナイーヴな世界観・行動原理の持ち主として宗吉が設定されている所以である。多くの大人（南翠、千木、その他）がやり過ごせてしまうものを簡単にやり過ごせない、たいへん物分かりの悪い宗吉であるからこそ、伊奈子のような存在に対して憧れつつも足踏みをせざるを得ないという葛藤に直面することができたと言わなければならない。ここには〈愛と錯覚の政治学〉とも呼ぶべきものが作動している。だとすれば、読者は、むしろ、障壁をクリアできず足踏みしている宗吉をそのまま受け入れてやらなければならない。

なお、石川には、敗戦を挟んでの女性の変貌を描いた先行作として「黄金伝説」（『中央公論』一九四六・三）がある。この作品については以前論じたことがあり、一杯の本物のコーヒーを目当てにやって来た《わたし》が横浜のバラック店で図らずも再会した女性——《わたし》の旧友の妻でかねてより密かに憧れの気持ちを抱いていた——が、店の外で出会った黒人兵のところへ駆け出して行く場面の《そのひとの背はアディユともいはずにわたしのはうに向けられて、それはもう永劫に決してこちらへはふり返らないであらうけしきであつた》<sup>(20)</sup>という記述にある《アディユ》という言葉、占領軍兵士と一見無関係なフランス語の「さようなら」にこだわって、ナポレオンのロシア侵攻にまつわるフランス人男女の悲劇を描いたバルザックの「アディユ」（一八三〇）との所縁を見出し、「黄金伝説」が戦争と男女、敗戦と男女の問題を大きな視野で捉えた作品であることを明らかにした<sup>(20)</sup>。やはり敗戦を挟んでの女性の変貌を描いた「善財」においても、意外な言葉の使い方にこだわること、GHQによる支配という大きな文脈が浮び上がって来ることになった。「黄金伝説」が、〈男女のすれ違いもの〉という物語の型を用いた敗

戦Ⅱ体制転換への痛恨の思いに満ちた批判だったとすれば、「善財」も、一種求道的な〈青春小説〉という型を用いた敗戦Ⅱ体制転換への痛恨の思いに満ちた批判だったのである。

以上、この節では、伊奈子の発した言葉がなぜ《Come again》と英語なのだろうかということに着目して、宗吉の足踏みには、〈敗戦の結果の受け入れへの足踏み〉を読み取り得ることを確認した。

## (2) 時期設定の意味

次に、二つ目の疑問点、一九四九年八月に発表されたこの小説の時期設定について、《一箇の青春の劇》と読み得る普遍性の高い面を持つ小説であるにもかかわらず、物語の発端が《昭和二十二年の一月はじめ》、終末が《四月の末》と非常に具体的であるのはなぜなのだろうかということについて考えたい。

前節で考えたようにこの小説が〈敗戦の結果の受け入れへの足踏み〉という水準で読むことができるとすれば、同様に〈受け入れ〉〈引き受け〉を問題にした石川の作品として「処女懐胎」が思い合わせられよう。稿者は以前この作品について、《石川は、敗戦国における半ば以上強いられた体制転換、中でも非常に重要かつ深刻な、葛藤と問題に満ちた新憲法の制定過程について、キリスト教の奇跡の物語とオーヴァラップさせることでフィクションとして見事に描き出し、単純ならざる引き受けの課題を言語化したのである》と論じたことがあるが、この作品の時間的設定が一九四七年一月二日から同年五月はじめまでであった。一九四七年五月三日が新憲法（日本国憲法）の施行日であり、その直前の時期に物語が設定されて新憲法の制定に象徴される敗戦後の「民主化」の

〈受け入れ〉〈引き受け〉の問題が扱われていたわけだが、大変興味深いのは「善財」も《昭和二十二年の一月はじめ》から《四月の末》までと物語の時期設定がほぼ重なっていることである。

敗戦という大事件から生じた政治体制上の大転換の重要な帰結の一つが新憲法制定であるとすれば、〈敗戦の結果の受け入れへの足踏み〉を問題にしている作品どうしで時期設定が重なっていても何ら不思議はあ  
るまい。

ただ、同じ時期を扱っているとは言え、「処女懐胎」が『人間』一九四七年九月号から一二月号と作中の時期設定にほど近い時期に発表されたのに対して、「善財」は一九四九年八月と約二年という時間が経ってからの回顧的な時間設定となっている。この一九四七年前半を、ここにこそ日本の民主化の可能性のために立ち返るべき〈初心〉の時期、ゲームをリセットすべき地点、復元ポイントと見る石川の根強い認識を窺うべきだろうか。それとも、はじめに見た野口武彦が言うように《昭和二十四年、早くも復活しつつあった社会秩序、見かけの安寧に蔽われた猥雑な日常への嫌忌、そして、戦後の創世記の闇空に作者がまちかくふり仰いだ無名の形而上学がまた遠ざかりつつあることの子感》、すなわち敗戦後の民主化の可能性の《遠ざかり》、失望の大きさをこそ「善財」から読み取るべきだろうか。いずれにせよ、作中世界の時期設定の具体性に着目することで、敗戦後の民主化の成否という大きな遠近法の中にこの作品を位置付けられることが明らかになった。

「処女懐胎」の男性主人公・大江徳雄が、貞子の〈処女懐胎〉（＝敗戦・占領によって孕まれたもの）の受け入れにはやや戸惑いつつも、総じて戦後の状況に適応するのに長けたオポチュニストだったのに対して、ナイーブな宗吉からは敗戦・被占領全般を否認するより強いラディカリズ

ムを読み取れるとすれば、見失われた〈初心〉の代え難さへの思いが、そのラディカリズムを呼び寄せたということになるだろうか。

### （3）空間設定の意味

二つ目の疑問は時間に関わるものであったが、三つ目の疑問点は、なぜ宗吉は船で海から東京にやって来るのかという経路・空間に関する疑問である。《鉄道の輸送力がまだまだおもふやうに回復するに至らないから》（三八八）と作中に書かれている通り、房州の南から東京に出るならば船のほうが便利であったという当時の交通運輸事情を反映させたものであることはその通りなのだろうが、稿者が問いたいのは、主人公が海から東京を目指すような設定にそもそもなぜなっているのかという設定の水準についての問いである。そのような設定にどのような意図が込められていたのかという問いである。

作品冒頭部、悪天候のためたつぷり四時間余計にかかってやっと芝浦に上陸間近、《やうやく品川ちかく、いくさで破壊された台場のあたりを越したとき》（三八七）という記述があるが、《台場》がそもそも、幕末、ペリー来航、開国要求に備えて造られた砲台であったことはよく知られている。その《台場》が破壊されているのももちろん米軍の攻撃によるものであり、宗吉は、言わば敗戦＝国防の失敗を具象化したオプジェを上陸間際に見せつけられるわけであるが、それは同時に、敗戦を外から眺めることでもあったことに留意したい。

作品の記述は、視界に入ってきた《芝浦の棧橋》の明るさを描きながら、宗吉や志方をすぐには東京に上陸させず、宗吉の略歴に紙幅を費やし、まるで読者に海からの東京へのアクセスの大変さを印象付け、体感

させようとするかのようなのである。ここには、物語の主要な舞台である東京を外から見るという遠近法を作品に組み込もうとする意図が窺えないだろうか。

志方が船乗り・船長として徹頭徹尾〈海の論理〉で生きる人間であり、〈陸の論理〉に否定的であることについては、既に第三章（1）で見た通りだが、そこに、日本の中心、陸の中核である東京を相対化する、外からの眼差しが組み込まれていたことは繰り返すまでもあるまい。その志方の、『おい、海に來いよ。おれといつしよに船に乗れよ。』『おい、海に來る氣になつたら、いつでもおれのところに来いよ。』（四四六）という作品末尾での宗吉への誘いかげが、〈敗戦の結果たる伊奈子の現状〉Ⅱ〈東京での出来事〉の〈受け入れ〉に足踏みする宗吉の膠着状態を大きく相対化する、海からの遠近法、東京の外からの遠近法であることは、もはや明らかであろう。

志方の海への誘いに対して宗吉の返答は『「遠すぎる。」』である。つまり、宗吉には間近に解決すべき重要な問題があり、それが物語全体の中で重要な問題となっていることはもちろん動かない。したがって、志方の〈海の論理〉が宗吉の問題を矮小化するものではないことは言うまでもない。ただ、その宗吉の問題が、別の論理、外からの遠近法によって大きな文脈の中に置かれることで、いたずらな絶望にも悲観にも墮さず、求道的な若者が辿るべき必然的な段階としてしかるべき重要性を獲得できていることを見逃してはなるまい。

以上、本章では、英語の使用、時期設定、空間設定の三点に着目することにより、『一箇の青春の劇』にとどまらないこの作品の別次元の読みの可能性、すなわち具体的には〈敗戦の結果の受け入れ〉ないしはそ

の〈受け入れ〉へのためらい・足踏みが問題になっていると読み得ることを明らかにした。

### おわりに

如上、本稿では、『華嚴經』〈入法界品〉の善財童子の善知識歴訪を踏まえて書かれた「善財」を論じて来たが、石川が善財童子の物語に象徴される大乘仏教の修行階梯（普賢行）を意識した作品を書いたのは、実はこれが初めてではなかった。一九三七年二月に第四回芥川龍之介賞を受賞した「普賢」（『作品』一九三六・六・九）で既に踏まえていた。「普賢」一篇については詳細に論じたことがあり、改めてここで縷説することはしないが、善財童子と関わる部分についてざっと確認しておこう。

ジャンヌ・ダルク頌歌を作ったクリスティヌ・ド・ピザンの伝記を写さうという語り手の『わたし』は、本地垂迹的な発想に依拠して自分を拾得Ⅱ普賢菩薩（親友の庵文蔵は寒山Ⅱ文殊菩薩）と見立てながら、クリスティヌに連なる役割と認識している。だが、実はこの構図は、ジャンヌ・ダルクが文蔵の妹の左翼活動家ユカリに接続、クリスティヌ・ド・ピザンが『わたし』が肉体的交渉を持つ酒場の女・綱に接続し、全体として〈理想〉〈憧憬の対象〉と〈現実〉〈俗塵にまみれた存在〉という対比を成していたのである。物語の展開とともに、かつて無垢清純と見えたが今は官憲に追われる辛苦からか荒み切った風貌と化していたユカリは逮捕され、文蔵は命を絶ち、綱の肉体こそ『わたし』が拾得の筈にすぎり普賢の大道に立ち直るべき地盤<sup>23</sup>と見定めるに至り、当初設定された対比構図は、最後に天台本学論的な〈煩惱即菩提〉〈生死即涅槃〉という認識、現実そのものが肯定されるべき理想的世界に他ならないと

いう一元的認識に収斂する。

特に注目しておきたいのが、ユカリの変貌に驚嘆する次の場面である。

慳貪に燃える眼、ゆがんだ唇、ぞつとする雀斑……「略」わたしが念じつづけ頼みきつてゐたユカリの出来工合とは全然ちがふ別の女、おそろしくも無縁なる他のたましひと、いつかユカリは入れ変つてしまつたのだ。<sup>33)</sup>

憧れの女性の変貌。それを、別の女との入れ替わりと捉えている。これは「善財」における、《ホ、テ、ル。何といふ発音の仕方だらう。「略」伊奈子ではない別の女がいつのまに掬りかはつてゐたのか。異変であつた。宗吉はこの異変には堪へられなかつた》(四三〇)と良く似た捉え方、レトリックではないか。

もちろん「普賢」ではこのユカリの変貌のあと、ユカリを仮の姿とした普賢菩薩の顕現へともう一展開あり、一度、《理想》の失墜・幻滅を経たからこそ、《現実》への直面以外に選択肢はないという次の段階に進めたのに対して、「善財」の宗吉は、次の段階に進めないまま足踏みしているという違いは大きい。しかしながら、大乘仏教的な修行階梯、普賢行を物語の展開の中に組み込む、重ね合わせるという発想は同じものであり、修行階梯上どこまで進めたかという違いに過ぎないとも言える。

「普賢」が、思想弾圧の時代における《文芸復興》《宗教復興》という文脈を横目で睨みつつ、理想／現実、精神／肉体の乖離を生きる人間模様を石川なりに領略しようとした試みとしていわれる「昭和十年

代文学」の代表作の一つに数え入れられているとすれば、「善財」は敗戦後・被占領期における民主化の可能性が縮小してゆく中、民主化の可能性が一番大きく見えた時期に定位し、若者の一途さナイーヴさに託して敗戦および敗戦後の現実の受け入れへの葛藤を再び問題化してみせた作品として、米軍基地問題等により合衆国への従属体制が露呈し問題化している今日<sup>35)</sup>、改めて読み直すに値する歴史的価値を持つと評価し得よう。

このような歴史的価値は、大乘仏教的な修行階梯の型を重ね合わせることで得られた登場人物の人間としての普遍性といったものとも無関係ではあるまい。宗吉の可憐さ、ナイーヴさ、一途さが善財童子の物語と重層化することによって、物語は一種有機的に力強さを増しているはずである。石川が組み込んだ様々な仕掛けは決して林房雄や北原武夫が言うような外付けの無関係な枠・額縁ではなかつたのである。

「善財」の主人公の若者の純真無垢さ・一途な求道性が物語の展開の重要なドライバーとなつている点に着目した場合、その先行類似作として「白描」(《長篇文庫》一九三九・三〇九)が思い起こされよう。彫刻家への夢を持った下町出身の若者・鼓金吉(一九歳)にも純真さや一途な求道性が付与されており、様々な芸術家やパトロンとの交流を通して、芸術から実践へ、東京から北京へと自身の進むべき方向性を発見させる。異性への憧れも組み込まれているが、それはあくまでも憧れに留まり、その点は《愛の求道性》が主題的に組み込まれた「善財」とは異なるが、日中戦争下に発表された作品として日本の中国侵略の問題を組み込んでいる点で、敗戦・被占領という大きな政治レヴェルの問題とも関わる「善財」と釣り合つていよう。<sup>36)</sup>

さて、ここまでは「善財」先行作との系譜性であったが、「善財」よ

り後の作品との関係ではどうだろうか。

ナイーヴな若者が革命運動・労働運動的なものに目覚めて行く（革命小説）とも言われる「鷹」「珊瑚」（一九五三）「鳴神」（一九五四）にももちろんつながりを見出せるし、ナイーヴさに形而上学性や神話性が加わった「虹」「荒魂」にもつながりを見出せようが、ここでは「善財」発表からそう遠くない時期に書き始められた〈童話翻案〉系の作品群について触れておきたい。

「小公子」（一九五二）「蜜蜂の冒険」「乞食王子」「アルプスの少女」（一九五二）「白鳥物語」（一九五三）「家なき子」（一九五四）「愛の妖精」（一九五五）の七作が該当する作品群で、これら著名な児童文学（童話）のパロディと言うべき短篇小説たちは、書き換えや後日談などさまざまな形でアレンジを加えられているが、ポイントは、《児童文学作品の主題の明快さ、明朗さ、その主人公たちのイノセンス、ナイーヴさを糧として、捨て子譚の主人公のひたむきさはそのまま生かし、他方で貴種流離譚の主人公には貴賤の別を否定させるというアレンジを加えつつ、身分制の否定や平等の実現といった人間社会にまつわる自然法的な理念を引き出した》<sup>(8)</sup>点にある。特別扱いされるのを《「いやだ。」と拒絶する宗吉の公平さと直結していよう。

以上本稿では、具体的な時間設定等に着目することで、敗戦後の被占領下の現実の受け入れへの葛藤を描いた作品として「善財」一篇を読むことができることを明らかにした。善財童子の善知識歴訪の物語ほか、石川が組み込んださまざまな仕掛けが決して林・北原が言うような外付けの無関係な枠・額縁ではないことが確認できた一方で、《戦後風俗は作品の外形、謂はば借物にすぎず、そのやうな風俗小説的趣向の集大成

の上に、観念的な絵模様を繰りひろげようとしてゐる》という福永のよ  
うな観念化する読み方ではなぜ《Come again.》という特異点が組み込  
まれているかといった細部についてうまく理解できないこと、時代状況  
を捨象しては読めないことも確認できたはずである。福永の文章が一九  
五七年に書かれたことを考えれば、作品の時期設定である一九四七年、  
発表された一九四九年、占領が一応終り、「もはや戦後ではない」と言  
われたあとの一九五七年、そして合衆国への従属体制から未だ脱却でき  
ないでいる現在、これら四つの時期の間の距離を測定しつつ作品に接す  
る必要を強く感じずにはいられない。

#### 【注】

- (1) 《頑強で健全な魂をそなえた頑強で健全な少年は、ほとんど例外なしに、一度は海に行きたいという熱にうかされるのはなぜか?》八木敏雄訳、ハーマン・メルヴィル『白鯨（上）』岩波書店、二〇〇四、五九頁
- (2) 『国訳大蔵経第七卷』国民文庫刊行会、一九一七、五五八頁。原文は総ルビだが、ルビは適宜取捨した。六十巻本「華嚴経」の訓み下しである。
- (3) 中扉に《昭和二十四年七月作》と記載。
- (4) 「作品発表年表」（『石川淳全集 第十九卷』筑摩書房、一九九二）の、七十枚程度から二百枚程度までを中篇とするのに従う。初出誌の目次では、『百枚』と謳われている。
- (5) 以下、「善財」からの引用は『石川淳全集 第三卷』（筑摩書房、一九八九）に拠り、引用直後の（ ）内に漢数字でノンブルを示す。
- (6) 福永「解説」、石川淳『紫苑物語』新潮社（新潮文庫）、一九五七、二〇二、二〇三頁
- (7) 井澤「石川淳（十二）七 短い小説」『近代文学』一九五九・七、五〇六頁（↓『石川淳論』彌生書房、一九六一）

- (8) 安藤「第九章「みじかい小説」について」『石川淳論』桜楓社、一九八七、一五九頁
- (9) 高「続・生きることを学んだ本 15 善財 石川淳」『ちくま』二二二、一九八八・一一、三三、三三頁。のち、高「生きることを読むこと」(筑摩書房、一九九二)収録時に改稿。
- (10) 野口「見立て創世記の世界—石川淳論(その五)」『東大文学』九、一九六五・一〇、九二頁(→野口『石川淳論』筑摩書房、一九六九)
- (11) 中島「石川淳の世界4 「無頼派」からの脱却—最後の晩餐」『善財』「片しぐれ」『野守鏡』「文宴」三三、一九七二・七、一八頁。
- (12) 《大品般若経(摩訶般若波羅蜜経)の注釈書。一〇〇巻。龍樹著と伝える。サンスクリット原典、チベット訳とも現存しないが、鳩摩羅什(くまらじゅう)が後秦の弘始七年(四〇五)に一〇万頌に及ぶ原典のうち初めの三四巻を全訳し、残りは適宜抄訳したという。空(くう)の立場に立ちながら肯定的に諸法実相を説き、大乘の菩薩道を明らかにする。引用文献が多く、解説がくわしく、仏教百科の役割を兼ねる。》『大智度論』『日本国語大辞典』JapanKnowledge
- (13) 畦地「石川淳後期作品解説」和泉書院、二〇〇九、三一九頁
- (14) 『国訳大藏経 論部 第一巻』国民文庫刊行会、一九一九、二四一頁。原文は総ルビ・追い込みだが、ルビを取捨し、二句ごとに改行した。
- (15) 鎌田、前掲書、六九頁
- (16) 「仏国禪師文殊指南讚」の書誌等については、瀧本弘之「中国古版画散策 第二回」(『東方』四〇九、二〇一五・三)、尾崎康「仏国禪師文殊指南図讚」の版本について(『杏雨』武田科学振興財団、三、二〇〇〇・四)、椎名宏雄「仏国禪師文殊指南図讚」の諸本(鎌田茂雄博士古稀記念会編『華嚴学論集』大蔵出版、一九九七)、牧野和夫「杭(明)州刊本類船載を通してみた宋代「文物」の我邦「文物」への影響—その一端—熊野本地」・「仏国禪師文殊指南図讚」等(和漢比較文学会「説話文学と漢文学(和漢比較叢書 第十四巻)』汲古書院、一九九四、「解説」(大谷大学図書館編『神田邨・倉博士寄贈図書善本書影—大谷大学図書館蔵』大谷大学図書館、一九八八)、川瀬一馬(解説)、『石井積翠軒文庫善本書目』石井光雄、一九四二)などを参照。
- (17) 東北大学附属図書館蔵、「東アジア出版文化研究資料画像データベース」
- (18) スにて公開。浪華・蔵鷲菴蔵版、大坂・藤屋淺野彌兵衛、明和四(一七六七)年刊。縦二八六mm×横一一二mm。
- (19) 「後得智」『仏教語大辞典』JapanKnowledge
- (20) オカミが、善財童子が訪なう二五人目の善知識・遊女ヴァスミトラ(婆須蜜多女)——性愛を通じて男を悟り(離欲)に導く——を踏まえた存在と見得るのは、畦地(前掲書、三二七頁)が触れている通りである。宗吉が到達できていない伊奈子のほうが対応しているとする野口武彦(前掲書、二六九頁)、森晴雄「善財」論「灯のないホテル」(森安理文・本田典國(編)『石川淳研究』三弥井書店、一九九一、一三七頁)はおかしい。ただ、既に「淫欲ハ即チコレ道ナリ」の論理を媒介にして、善財童子の求道が《愛の文殊の場まで行く道》(『愛の求道』ヘスライドさせるところにあるのだとすれば、ヴァスミトラの段のことさらな関連付けが、わざわざだめ押し的に必要なのかどうか。
- (21) 「無尽灯」については、拙著『石川淳作品研究—「佳人」から「焼跡のイエス」まで』(双文社出版、二〇〇五)第九章を参照。
- (22) 《大智は愚の如し》(蘇軾「歐陽少師の致仕を賀し啓す」と言われるが、志方のスケールの大きさが根本智を得た菩薩に類えられるものだとすれば、志方に文殊菩薩を重ねることも許されよう。《騎獅文殊を中心に、善財童子が先導し、仏陀波利と最勝老人とが付き添い、優填王が手綱をとる》(『国史大辞典』JapanKnowledge)《文殊渡海図》という図像があり、奈良・安倍文殊院の木像などが有名だが、作品冒頭の志方と宗吉が船で東京を目指す姿に重なって来ないだろうか。
- (23) 俠客の親分だが勤王討幕派に就いたため、戦中に千木が取り上げる対象となったのであろうが、清水港という(海)に開けた土地と関わる点は志方との関係で少々気になる。いや、それよりも、作中有名な「馬鹿は死ななきや直らない」の一節が連想され、それが性懲りもなく軽佻な千木への当てこすりになっていると取るべきであろうか。
- (24) 桜田門外の変を踏まえたタイトルから明らかのように、浪花節や講談で、尊王(勤王)攘夷派が開国派を凌駕してゆく歴史的転換点に取材したものの(海)に開けてゆくことが一旦閉ざされた事件とすることができ
- る。なお、いわゆる「愛国浪曲」を含む戦時下の浪花節興行の実態につ

いては、真鍋昌賢『浪花節 流動する語り芸―演者と聴衆の近代』（せりか書房、二〇一七）、特に第四章から第七章を参照。

(24) 例えば、袖井林二郎『拜啓マツカーサー元帥様―占領下の日本人の手紙』（岩波書店、二〇〇二）など参照。

(25) このあと、国会開会式における勅語で《この時に当り、われわれ日本国民が真に一体となつて、この危機を克服し、民主主義に基づく平和国家・文化国家の建設に成功することを、切に望むものである》（一九四七年六月二三日）、《現下の深刻な経済危機を打開し、文化国家にふさわしい国民道義の高揚をはかり、民主的、平和的国家を再建し、信を世界に求めることは、われわれ日本国民が果さなければならぬ最も重大な責務である》（一九四八年一月二日）、《わが国が、真に、文化国家としての実質を備え、国際社会の一員として復帰し、全世界の信頼をうるのに、今後もお、たゆみない努力が必要であると思ひます》（一九四八年一月八日）、《日本国民は、新憲法の精神に基き、その理想とする民主的文化国家の建設に向かつてたゆみない努力を続けてきました》（一九四八年一月二日）、《世界永遠の平和を念願する日本国憲法の理想を心とし、民主主義に基づく文化国家建設の目的に向かつて、わたくしたちは、著々歩みを進めています》（一九四九年三月一九日）と、営々と繰り返され続ける。引用は、国立国会図書館〈国会会議録検索システム〉に拠る。

(26) 《公共の福祉》は言うまでもなく「日本国憲法」に用いられている用語。

(27) 井澤義雄、前掲論、初出六頁。

(28) 《かくのごとく東京港は時運の発展と共に逐次港湾の施設を整え、大正十四年に日の出棧橋の完成を見、昭和七年には芝浦岸壁ができ、また越えて昭和九年には竹芝棧橋が完成し、昭和十六年五月二十日をもって貿易港として開港されたのであります。戦時中における東京港は一部を軍用に使われ、終戦後は進駐軍に接収され一般貿易港としての活用が制限されましたが、目下東京都港湾局は戦後の施設整備のための五カ年計画を着々と実施に移して、世界の港としての東京港の完成を急いでいるのであります。》『港区政ニュース』一九五二年七月二五日号（デジタル版港区のあゆみ『新修港区史』一九七九、六九一頁、『昭和三十四年五月、東京港の諸施設に対する米軍接収が最終的に解除され、全施設の返還をみた』同、八六六頁）。また、船舶のSCAPに登録、証明書の携行が必要

であった。竹前栄治・中村隆英監修『GHQ日本占領史 第54巻 海上輸送』（日本図書センター、一九九八、二六六頁）を参照。

(29) 『石川淳全集 第二巻』筑摩書房、一九八九、三三三頁

(30) 前掲拙著、第九章

(31) 「石川淳「処女懐胎」論―奇跡とその引き受け、「民主化」とその引き受け」『日本女子大学紀要 文学部』六三、二〇一四・三、五〇頁

(32) 前掲拙著、第二章

(33) 『石川淳全集 第一巻』筑摩書房、一九八九、四二六、四二七頁

(34) 同、四一六、四一七頁

(35) 例えば、白井聡『国体論―菊と星条旗』（集英社、二〇一八）などを参照。

(36) 「白描」の特に鼓金吉については、前掲拙著第六章「四」を参照。

(37) 冒頭に記した通り「善財」の初収刊本は「鷹」で、「鷹」と同じ作品集に収録されている。

(38) 拙論「石川淳・童話翻案作品論―時事性とパロディと」『愛知県立大学文学部論集（国文学科編）』五五、二〇〇七・三

\*引用文については、仮名遣いは原文通り、漢字は原則として現行の字体に従った。引用文中の「」内の語は稿者による補足、傍線も稿者による。蔵書の図版掲載をお認め下さった東北大学附属図書館に感謝申し上げます。